市民社会をつくる

ボランタリーフォーラム

TOKYO 2018

つながりをずっと 出会いをもっと

2018年 2月9日(金)～11日(日・祝)

会場：飯田橋セントラルプラザほか

報告書

主催	東京ボランティア・市民活動センター
企画運営	市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2018 実行委員会
後援	東京都
特別協賛	株式会社ガイア、中央ろうきん社会貢献基金、トヨタ自動車株式会社 株式会社三菱東京 UFJ 銀行
協賛	NEC ネッツエスアイ株式会社、公益財団法人損保ジャパン日本興亜環境財団、東京都生活協同組合連合会 NPO 法人モバイル・コミュニケーション・ファンド
協力	ペルノ・リカール・ジャパン株式会社

（五十音順）

【お問い合わせ】東京ボランティア・市民活動センター
フォーラムホームページ：http://www.tvac.or.jp/vf/
フォーラム Facebook：「ボランタリーフォーラム tokyo」
TEL：03-3235-1171　FAX：03-3235-0050
ボランタリーフォーラム tokyo

はじめに

東京ボランティア・市民活動センターでは、「ボランティアまつり」「ぼらんてぃあ・めっせ」、2004年からは「ボランタリーフォーラム」と名前を変えながらも、開設当初より、ボランティアや市民活動に関わる方や関心のある方が集い、つながる場をつくってきました。

今年度の「市民社会をつくるボランタリーフォーラムＴＯＫＹＯ2018」（以下「Ｖフォーラム）では「つながりをずっと　出会いをもっと」というテーマに、26分科会、３特別企画を実施し、のべ850名の方にご参加いただきました。

本報告書には、それぞれの分科会の開催目的や様子、分科会を通して伝えたかった実行委員の想いや参加者の声、実施しての成果やこれからの課題が掲載されています。また、職種や年齢も異なる多様な実行委員会メンバーが、議論を重ねながら、Ｖフォーラムの形を作り上げてきた記録も同時に収められています。

より多くの方が本報告書を目にすることによって、誰もが自分らしく生きることができる豊かな社会を築いていくための、一人ひとりにとってのきっかけや新たな一歩となることを願っています。

東京ボランティア・市民活動センター

もくじ

はじめに
第1章　企画編
市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2018 ができるまで・・・・・・・・・・・・2
第2章　実施編
市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2018 開催概要・・・・・・・・・・・・・・6
各プログラム実施報告
01 NPO にまつわる人たちのキャリアを考える もやもやカフェ リターンズ・・・・・・・・・8
02 みんなと考える“ダイバーシティな働き方”　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
03 新しい多世代コミュニティの形を創造する SNS・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
04 2020 東京オリンピック・パラリンピックでボランティアができること！・・・・・・・・・14
05 シングル女性の貧困 ～社会のしくみを考えてみよう～・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
06 地域活動への若者参加の可能性を探る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
07 コーディネーターって何だろう？ ～多様な社会課題の、その中で～・・・・・・・・・・・20
08 エシカル消費って何だろう？～世界が続くためにできること～・・・・・・・・・・・・・・22
09 “フィールドサイン”から読み取る「まち」の声 ～みんなでつくる「地域観察術」～・・・24
10 ともに生きる社会へ ～多様性を認め合い、ゆるやかにつながる～・・・・・・・・・・・・26
11 災害時の困り事 ～性的マイノリティ（LGBT）の視点から～・・・・・・・・・・・・・・28
12 シニアを呼び込むプログラムの作り方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
13 地域で進める SDGs ～「誰一人取り残さない」世界をつくる～・・・・・・・・・・・・・32
14 交流会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
15 合理的配慮からみる相互理解・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
16 “踏み出す一歩” ちょっと気になるボランティア・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
17 私たちがつくる「地域包括ケアシステム」①～地域の担い手は誰？～・・・・・・・・・・40
18 助成金ってなんだろう？ ～ボランティア・NPO・助成団体、それぞれの想い～・・・・・・42
19 障害のある人の「地域で子育て」 ～助けあい、やわらかい地域社会へ～・・・・・・・・・44
20 若者をやる気にさせる活動作り・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
21 私たちがつくる「地域包括ケアシステム」②～一緒にワクワクしませんか？～・・・・・・48
22 災害とセルフケア・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
23 NPO 法から 20 年 ～市民社会の源流をたどる～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
24 被災者支援/人道支援 ～「人」を支援するという意味～・・・・・・・・・・・・・・・・54
25 地域・家庭と共にみんなでつくる「みんなの学校」とは？・・・・・・・・・・・・・・・56
26 クロージング全体会 ～出会って、つながって、さぁここから！～・・・・・・・・・・・58
27 Open Café（休憩スペース）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
28 情報誌『ネットワーク』表紙原画展・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
29 ふれあい満点市場 ～NPO・NGO の作品展示販売～・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
（参考）市民社会をつくるボランタリーフォーラム開催状況・・・・・・・・・・・・・・・・65
実行委員会名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
協賛・協力団体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68

＜第１章＞
企画編

ボランタリーフォーラムができるまで

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO とは？

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO（以下、「V フォーラム」）は、私たちの暮らしに関わるさまざまな「社会課題」に焦点をあて、それを共有し、私たち市民にできることを考えていくためのイベントとして 2004 年から始まり、今年で 14 回目となりました。

初回から一貫して、分野、地域、セクターを横断したボランティア・市民活動にかかわるメンバーで実行委員会を組織し、ボランティア・市民活動をする中で直面する課題や想いをもとに企画・運営しています。分科会を通して、想いや考えを共有し、参加者や実行委員、それぞれの一歩につながることを目的としています。

実行委員会について

V フォーラム実施にあたり、今年度のフォーラムの方向性を検討するために、準備会を３回開催しました。準備会では、これまでのフォーラムを振り返るとともに、今年度の目標、取り上げたいテーマやキーワード、実行委員のあり方などを話し合いました。

その後、準備会での話し合いをふまえ、さまざまな分野・地域から集まったメンバーからなる実行委員会を立ち上げ、企画や当日の運営体制に関する話し合いを始めました。実行委員会は、ふり返りの回を含め、10 回開催いたしました。

今年度の方向性は、「新たな社会課題を明らかにしていく」「今、取り組まなければならない課題を取り上げる」「フォーラムで話し合われたことを身近な地域に持ち帰る」こととし、分科会の企画は常にその方向性に立ち返りながら検討を進めてまいりました。

実行委員会では、実行委員がボランティア・市民活動の中で感じる社会課題や関心事を、キーワードとして出し合いました。挙げられた多様なキーワードを「社会・しくみ」「コミュニティ」「参加のかたち」「生き方・はたらき方」の４つのカテゴリーにまとめました。実行委員は、それぞれのカテゴリーに分かれ、分科会を企画しました。

分科会企画については、分科会の企画案を持ち寄り、カテゴリーや実行委員会全体で企画内容について何度も話し合いを重ねました。こうした分科会の企画を進めると同時に、V フォーラム全体に関わる運営については部会を設けることで話し合いを進めました。

今年度は、当日までの運営に関わる「ファンドレイズ」「広報」、分科会の１つである「全体会（クロージング）」「交流会」について検討する４つの部会を設けました。部会では、「どのように協賛・

協力を拡大していくか」、「効果的に広報するにはそうするか」「どのように参加者を募るか」といった話し合いを重ねました。また、アンケート回答者140名のうち、約7割の方は「初めて参加した」と回答しており、より多くの方にVフォーラムを伝えることにつながりました。また、クロージング、交流会についても部会での検討を重ねることで、より参加しやすい形の企画になり、「興味深いテーマが多かった」、「普段は出会いえない方々に出会えた」等の声もありました。

また、今回の「つながりをずっと 出会いをもっと」というテーマについても実行委員会内で検討を重ねました。これまでのつながりを大切にし、新しい出会いによって、多様な視点で一人ひとりができることを考える。そうすることで、誰もが暮らしやすい社会に近づくのではないか、そんな想いから、このテーマに決定し、すべての分科会から共通して意識されるものとなりました。

分科会企画案の公募

これまでのVフォーラムにない視点や分野、課題を取り入れ、より幅広い社会的テーマを取り入れることをねらいとするため、昨年度に引き続き、分科会企画案を公募しました。分科会企画案の公募が採用された場合もそのまま実施するのではなく、公募の提案者も実行委員となり、他の分科会企画と同様、実行委員会で内容を検討し、多様な考え・意見を取り入れた上で、内容を磨き上げていきました。また、他の分科会についてともに内容を検討し、Vフォーラム全体の運営にもかかわっていただきました。

募集概要と実施結果

【内容】

- ボランタリーフォーラムのプログラムの一つとして分科会企画案に基づいた社会課題の発信機会の提供
- 2018年2月9日（金）～11日（日）の内1コマ
- 予算は、30,000円まで

など

【条件】

- 実行委員会への参加が可能であること
- 企画案をもとに、実行委員会の中で一緒に議論・検討し、企画を作り上げ、実施に向けて協力していけること
- 40名定員の会場内で実施できる規模の企画など

【応募方法】

- 所定の企画書（A4サイズ2枚）に記載の上、郵送・メールにて申込

【応募期間】　2017年6月15日（木）～7月4日（火）

【結果通知】　2017年7月7日（金）

実施結果

- 件数　3件
- 応募者所属内訳

市民活動団体・・・・・・・・・・	1人
ボランティア・市民活動推進団体	1人
大学生・・・・・・・・・・・・	1人

選考のポイント

- 社会課題をテーマにした企画である
- 広く一般を対象にした企画である
- 多様な市民の参加が期待される企画である
- 本フォーラムで波及効果が期待される企画である
- 他団体との連携・協働が求められるような企画

＜第２章＞
実施編

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2018
開催概要

趣旨

「市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO」は、私たちの暮らしに関わるさまざまな社会課題に焦点をあて、それを共有し、私たち市民にできることを考えていくためのイベントとして、2004年から開催しています。

初回から一貫して、分野、地域、セクターを横断したボランティア・市民活動にかかわるメンバーで実行委員会を組織しています。今回は、今、取り組まなければならない課題や新たな社会課題を明らかにしていくことに視点をおき、分科会を企画してきました。

今年のテーマは「つながりをずっと、出会いをもっと」。これまでのつながりを大切にし、新しい出会いによって、多様な視点で一人ひとりができることを考える。そうすることで、誰もが暮らしやすい社会に近づくのではないか、そんな想いがこのテーマにはこめられています。

参加者のみなさんの声や想いを大切に、このフォーラムを、誰もが参加できる市民活動・市民社会を考える機会にしていきたいと考えます。みなさんのご参加をお待ちしています。

開催概要

テーマ	つながりをずっと　出会いをもっと
開催期日	2018年2月9日（金）19:00～21:00 2月10日（土）10:00～18:30 2月11日（日）10:00～18:30
会場	飯田橋セントラルプラザほか
主催	東京ボランティア・市民活動センター
企画運営	市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2018 実行委員会
後援	東京都
参加費	一般 2,000 円（1 分科会のみ参加の場合は 1,000 円） 大学・短大・専門学生 1,000 円（1 分科会のみ参加の場合は 500 円） 高校生以下、または 18 歳未満の方　無料 ※No.14「交流会」は、軽食代として別途 500 円（18 歳未満は 300 円）が必要です。 ※No.9のフィールドワークは、別途費用が必要です。（交通費など）

参加申込者数	389 名
出演者	79 名
実行委員	25 名
運営スタッフ・ボランティア	50 名
参加者述べ数	850 名

スケジュールと会場

日	時間	会場	分科会
2月9日	19:00～21:00	12階A会議室	01 NPOにまつわる人たちのキャリアを考える もやもやカフェ リターンズ
		12階C会議室	02 みんなと考える“ダイバーシティな働き方”
		10階A会議室	03 新しい多世代コミュニティの形を創造するSNS
		10階B会議室	04 2020東京オリンピック・パラリンピックでボランティアができること！
2月10日	10:00～12:30	12階A会議室	05 シングル女性の貧困～社会のしくみを考えてみよう～
		12階B会議室	06 地域活動への若者参加の可能性を探る
		12階D会議室	07 コーディネーターって何だろう？～多様な社会課題の、その中で～
		10階A会議室	08 エシカル消費って何だろう？～世界が続くためにできること～
	10:00～16:30	フィールドワーク	09 “フィールドサイン”から読み取る「まち」の声～みんなでつくる「地域観察術」～
	14:00～16:30	12階A会議室	10 ともに生きる社会へ～多様性を認め合い、ゆるやかにつながる～
		12階B会議室	11 災害時の困り事～性的マイノリティ（LGPT）の視点から～
		12階C会議室	12 シニアを呼び込むプログラムの作り方
		12階D会議室	13 地域で進めるSDGs～「誰一人取り残さない」世界をつくる～
	17:00～18:30	10階A・B会議室	14 交流会
2月11日	10:00～12:30	12階A会議室	15 合理的配慮からみる相互理解
		12階B会議室	16 “踏み出す一歩”ちょっと気になるボランティア
		12階C会議室	17 私たちがつくる「地域包括ケアシステム」①～地域の担い手は誰？～
		10階A会議室	18 助成金ってなんだろう～ボランティア・NPO・助成団体、それぞれの想い～
	14:00～16:30	12階A会議室	19 障害のある人の「地域で子育て」～助けあい、やわらかい地域社会へ～
		12階B会議室	20 若者をやる気にさせる活動作り
		12階C会議室	21 私たちがつくる「地域包括ケアシステム」②～一緒にワクワクしませんか？～
		12階D会議室	22 災害とセルフケア
		10階A会議室	23 NPO法から20年～市民社会の源流をたどる～
		10階B会議室	24 被災者支援/人道支援～「人」を支援するという意味～
	13:30～16:30	飯田橋レインボービル	25 地域・家庭と共にみんなでつくる「みんなの学校」とは？
	17:00～18:30	12階A～D会議室	26 クロージング ～出会って、つながって、さぁここから！～
2月10日・11日		10階フロア	27 Open Café（10日（土）・11日（日）9:30～17:00）
2月9日・10日・11日		10階フロア	28 情報誌「ネットワーク」表紙原画展
2月10日		1階区境ホール	29 ふれあい満点市場 ～NPO・NGOの作品展示販売～ （10:30～15:30）

０１　NPO にまつわる人たちのキャリアを考える もやもやカフェ リターンズ

開催目的

ボランティアではなく、本業や副業として NPO に関わろうとする人たちが増えていますが、そうした活動に関わることがキャリアとして社会に認識されているとはまだまだ言えません。NPO に関わる仕事でキャリア形成するには、そしてそれが認められるような社会をつくるためにはどうすればよいか、昨年に引き続き、ゲストからの情報提供や提案を交えて考えました。

開催日時

２月９日（日）19:00～21:00

参加者数

23 名（参加者 17 名、出演者４名、スタッフ２名）

出演者

青木　研輔さん（東大手の会代表世話人）
関口　宏聡さん（認定 NPO 法人シーズ・市民活動を支える制度をつくる会 代表理事）
市川　望美さん（非営利型株式会社ポラリス 取締役ファウンダー）
石山　恒貴さん（法政大学大学院 政策創造研究科 教授）

内容・成果・課題

1．青木研輔さん（東大手の会）からの話題提供

東海地方の中堅 NPO スタッフの働き方をヒアリングして５つのタイプにまとめた「NPO のキャリアモデル」（①内部育成型、②キャリアアップ転職型／渡り鳥型、③起業型、多業、④マルチワーク型、⑤転身・兼業型）について話題提供いただきました。NPO でのキャリアの特徴は、大きく言えば、一般的な企業で見られるような終身雇用型が比較的少ないこと、多様なキャリアモデルがあることです。社会的にも徐々に NPO での経験が認められてきており、特に「プロジェクトを回す能力」が評価されることが増えてきています。

2．ゲストからの問題提起とまとめ

1）関口宏聡さん

自分がシーズに入った当時は、新卒で NPO への就職がニュースになるぐらいでした。その当時に比べれば、今の NPO の雇用環境は劇的に改善され、キャリアとしても注目されてきていると思います。一方で、NPO はミッション（目的）を達成したら解散するのが原則です。解散すれば当然職員は解雇となるわけでもあり、自分も含め、NPO の経営者はそのジレンマで悩んでいます。

2）石山恒貴さん

NPO でキャリアを積むことの強みは「越境学習」ではないかと考えています。プロボノとして NPO に参加した企業人が参加前と後でどう変わったかの調査を行った結果、バラバラの意見をまとめる、人との信頼関係づくり、ミッションの確認、顧客のことを本質的に確認する、雑談などのスキルが普段の仕事の役に立ちそうなことがわかりました。こうした NPO での能力開発について興味があります。

3）市川望美さん

子育ての当事者として、当事者であることが果たしてキャリアになるのか悩んできました。自分はほしいものはつくっていいと考え会社を作りましたが、当事者にとっては当たり前のことを他の人たちにわかりやすく伝えていくためには様々な工夫が必要です。そこで課題となるのは「当事者性の呪い」です。これは、当事者であるという経験から、自分たちが一番知っていると思ってしまうこと、悪く言えば思い込みが激しいということです。当事者であることが事業や組織の成長を妨げないために何が必要なのでしょうか。

4）まとめ ～NPO で身につく能力とは～（※団体差・個人差があります）

＊回りの空気を読む／空気をつくる／説明するのがうまい
＊違う立場の人ともうまくコミュニケーションが取れる
＊手探りしながら話を整理できる
＊小さい団体ほど経営者目線に立てる
＊立場のフラットさ、相手を尊重する、役割を決めない
＊個人と発言を切り分けることができる

3. グループトークでの感想

＊NPO の規模が大きくなっても、市民の参加・情報公開といった側面や、そもそも合わない人は離脱するので、NPO らしさは失われないのではないか。

＊NPO は可能性があるとは言え、まだまだブラックな面もある。あとに続く人のために改善が必要。たとえば、適正な単価など、基準を示せるとよいのでは。

＊今は社会の変革期。NPO や企業のような組織形態に縛られて「こうでないといけない」より、多様な稼ぎ方を見つけるなど、自由な発想で取り組むことが重要。

＊もやもやはつきることないが、悩みを話せる場所がない。こういう場に持ち寄ることが大切。

参加者の声（アンケート結果などから）

＊NPO を自分のキャリアとして活かしたいと思いました。多様な働き方を叶えてくれるのが NPO だから。

＊パネリストの方と密に話ができたことが良かった。具体的なことを踏み込んできける。もう少し時間がほしかったなあー

＊もっともやもや、来年も開催宜しくお願いします。

企画・運営

市川　徹（株式会社世田谷社）【主担当・報告書】
増永　めぐみ（日本社会事業大学）

０２　みんなと考える"ダイバーシティ"な働き方

開催目的

ダイバーシティは日本語で「多様性」と訳しますが、社会におけるダイバーシティは“多様な人材を社会で積極的に活用する”ことと言われています。

この分科会では、障がい者やLGBT等の当事者が置かれている現状を踏まえて、企業での導入事例や働きやすい環境づくりのヒントを聞きながら、“ダイバーシティな働き方”について参加者と一緒に考えていく時間になりました。

開催日時

２月９日（金）19:00～21:00

参加者数

30名（参加者21名、出演者３名、スタッフ６名）

出演者

酒寄　久美子さん（株式会社セールスフォース・ドットコム 人事プログラムシニアマネージャー）

星　賢人さん（JobRainbow 働くを虹色に CEO）

白井　長興さん（NPO法人シェイクハートプロジェクト 代表理事）

内容・成果・課題

【内容】

今回はLGBTQと障がい者の当事者によるお話しと、雇い入れる企業側の視点として株式会社セールスフォースドットコムの人事部の方に講演いただきました。その後３つのグループに分けて各人と参加者が質問を投げかけながらダイバーシティな働き方について話し合う時間を設けました。

まずはNPO法人シェイクハートプロジェクト代表理事の白井長興さんより、障がい者となってからどの様に生きてきたか、そして大学を卒業した頃の超氷河期と言われた就職活動の中、当時の障がい者雇用がいかに大変だったかについて、そしてこれまでのご自身の仕事に向けての工夫や体験談など、どの様な働き方をしてきたか、ロールモデルを紹介しながら障がい者自身が社内で同僚に対して説明する機会の重要性を述べていただきました。

次にJobRainbowのCEO星賢人さんから、性的マイノリティの総称としてよく使われるLGBTQとは何か？生きている中で彼らが直面している表に見えない差別や、知らないことによる無自覚のハラスメントなど、日本に7%存在していると言われている彼らがどのような環境の中で生きているか、そして理解が進むことによる社会にとってのメリットなど、環境を整えることの重要性を分かりやすくそして講演いただきました。

それら当事者の話を受ける形で、株式会社セールスフォースの働き方について、その先進的な働き方や風土についてお話しいただきました。セールスフォースは世界的な企業で、国籍も性別も多能な方々が働いています。同社の理念はダイバーシティを超えた『イクオリティ』。全ての人が平等な関係の上で仕事に取り組むことを大切にされています。同社には様々なダイバーシティ委員会があり当事者が認知活躍を行い、全ての従業員がフラットな立場でまるで家族の様に働く環境を作る(OHANA)ことを目指しています。今回はそのエッセンスや取り組みをお話しいただき、これからの働き方に向けて大きなヒントとなりました。

【成果】

当事者の話を受けた上で、企業側の視点を聞けたのは大きかったと思われます。また世界的にもダイバーシティ経営に取り組む先進的な企業でもある株式会社セールスフォースドットコムさんの働き方を多くの参加者にお伝えできたのは主催としても得難い機会をいただいたと考えております。

また、講演後の各グループでのフリートークでも大変盛り上がりを見せ、各人の関心の高さを実感しました。

今回の分科会は、小さな一歩かもしれませんが、日本らしいダイバーシティを考えるキッカケとなれたのではと考えております。

【課題】

今回は先進的な活動をされている団体や企業の方にご登壇いただきましたが、日本社会においては全てがスタートライン付近にいることが多く、ダイバーシティという単語も一人歩きしたりまだ知らない人の方が多いかと考えています。

我が国では東京オリンピック、パラリンピックを始め様々な国から観光客を誘致したり、多様な働き方、外国人労働者など社会における環境の変化が起きつつあります。

ダイバーシティは着実に我々の近くにきているのですが、それを意識して行動に移すためにそれらの情報に触れたり学ぶ機会が限定的です。この様な分科会が自然と様々な所で開催され、良い意味で知識を広げていける機会を増やしていくことが直面している社会課題と言えるかもしれません。

参加者の声（アンケート結果などから）

・LGBT の方が就業する際、なにが大切なのかヒントをもらう事ができました

・さまざまな立場の方から直接、生の声を聞けたことが大きな収穫でした。ありがとうございました。

・講師の話はチョイスが excellent!　ただ場のまわし方、ラストの対話の時間が”おまけ”って感じて残念かも。明確な指示がないことも問とか。

企画・運営

白井　長興（NPO 法人シェイクハートプロジェクト）【主担当・報告書】

小川　達也（中央労働金庫　総合企画部　CSR 企画）

高橋　義博（府中市市民活動センター プラッツ）

谷口　陽香（東京ボランティア・市民活動センター）

０３　新しい多世代コミュニティの形を創造するSNS

開催目的

近年、様々なSNSツールがあり、使い方も様々となって来ました。実名を発信して相手に安心感を与える方法のSNS、social nameで発信できるSNS等、人や世代で好まれるものもそれぞれです。今回の世代よってSNSの媒体も使用方法も異なる中、お互いがどのように使用しているかを知り、それぞれの世代の得意シェアしていきます。

実際に自治会にてSNSを使用して多世代交流を図っている事例や、学生と社会人のSNSへの意識の違いを共有しながら、今後SNSを活用していくには、どのような取り組みが必要か、どのような活用の可能性があるのかを考えます。

各世代のお互いの得意をヒントに今後も新しいコミュニティを創り出すSNSについて一緒に考えていきたいと思います。

開催日時

２月９日（金）１９：００～２１：００

参加者数

２２名（参加者１４名、出演者３名、スタッフ５名）

出演者

新関　隆さん（東京家政大学）

宮野　ゆみこさん（自治会でSNS利用している事例紹介）

田名部　実里さん（現在の学生のSNS利用の事例紹介）

内容・成果・課題

（ 内 容 ）

普段いろいろなSNSが入っている中で、生活が分断している可能性もある。ただ、せっかくあるのであれば有効活用したい。

●話題提供（新関先生）：今から10年ほど前より、SNS、無料通信アプリ Twitter、Instagram、Facebook、LINE、Skypeなどが始まっています。 インフラとなっているが、民間が運営し、普及率が高くなってきています。良き社会を作るために、存在しているということになっています。 SNSができてから10数年、デジタルネイティブ世代も生まれています。 技術と人間の進歩は、ともに歩んでいます。類人猿との違い 人間は、見知らぬ人とのコミュニケーションの欲求があります。雑誌の欄、アマチュア無線など 今のSNSと変わらず、相手がわからなくても、投稿に興味のある人から関係をつくっていくことに興味があります。

●話題提供（田名部さん）田部井さんは高校３年生から、SNSを使い始めました。LINEは知っている人とのコミュニケーション。他のツールではSNSのみの繋がりもあります。 同じ趣味を持つ人（例：歌舞伎好きだけで繋がる　など） 個人的な投稿もありますが、HPのURLも載せて流せます。 複数のアカウントを持ち、趣味に合わせてアカウント管理をしています。実名はあかさないことも多くあり、非公開アカウントでのコミュニケーション やFacebook のような実名での登録が必要なものの仕様もしています。

Facebook ではイベント作成、写真の共有、連絡 プロジェクトページの運営も可能です。活動の報告など個人の投稿は、最近は減っています。世代が上の方や外国人とのコミュニケーションに使うことが多いです。Instagram は実名、匿名両方可能。芸能人や好きなお店もフォロー 思い出の記録 ストーリーといった 24 時間で投稿が消えものもあります。気軽に投稿することが可能な SNS も学生の間では現在、話題を読んでいます。

●話題提供（宮野さん） S 町会での SNS 利用について。28 才、大学生で Facebook、高校生で Mixy 始めました。香川出身で、子供会に所属していました。お祭りなど、町内会での活動が盛んな環境で育ちました。結婚して、3 年前に文京区に引っ越してきて、2 年前から町内会に入りました。子供の頃から地域のつながりが当たり前のようにあったことから、隣の人が誰だか知らないことに違和感がありました。ただ、町内会への入り方がわからず、区役所へ行きました。まずはお祭りから地域へ入り、そこで打ちとけて行きました。今は、広報の担当をしています。 古くから住んでいる人、新しく来た人には、ギャップがあります。町会活動に参加する人は限られていますが、人手は欲しています。 多世代交流したいが、新しい人自身も繋がりは欲しいです。ただ、濃い地域活動は仕事もあり厳しいです。お祭りなどの行事には参加したいが、参加の仕方がわからない人がいました。そこをつなげるためには？情報を周知するためには？ と考え、Facebook に町会報の公開 ・イベントのお知らせ ・活動報告を上げ、若い世代に情報が伝わりやすくなりました。ママ友の口コミ力は、本当に効果的です。 持続的に、ゆるく繋がることができるようになってきました。 0 か 100 ではなく、関わり方を選べるようになりました。

（成果）

世代を超えた教え合い情報を選ぶこと、社会・仲間作りが大切なことが全体で共有された。気持ちはある程度表現される中で、それに共感する人達が集まれるイベントとしてではなく、街歩きをあげるというだけでも SNS を開始できるきっかけとなり、交流が生まれてくることが発見できた。

（課題）

高齢世代には慣れない SNS です。全体共有の中で高齢世代も SNS をやりたいと始めた時に、孫に教えてもらいました。普段中々、コミュニケーションをとる時間がない孫世代とのやり取りが SNS を習うというツールを使って増やすことができるという声や、高齢者が操作しづらいことは現実だが、ビデオ通話ならとできることから SNS を使い出したという一歩踏み出して交流の生まれるきっかけの例が出ていました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・町会の広報で FB を使われていること、私の町会でもそのような方法を取れると良いと思う。

・仕事の関係で多世代交流の必要性を感じていたため、若い人や年上の人と意見交換ができて良かった。

・やればできると思いながら SNS は避けています。状況を知りたくて参加しました。今後どのように活用していくか更に発展させた講座が欲しいです。

企画・運営

小原　恵美（メディステップ（株）ホウカン TOKYO 三軒茶屋）【主担当・報告書】

直井　友樹（NPO 法人 NICE）

長瀬　健太郎（NPO 法人 good!）

神元　幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）

杉村　郁雄（NPO 法人日本ファシリテーション協会）

4　2020東京オリンピック・パラリンピックでボランティアができること！

開催目的

自らの意思で創造的に社会の課題と関わるのがボランティア活動の目指す姿。オリンピックやパラリンピックの開催 をサポートするボランティア活動が単なるイベントのマンパワーではなく、参加する一人ひとりにとって価値ある経験 とするために必要なことは何でしょうか。オリ・パラが日本や東京にとって大きな成果を生み出すためにボランティア ができることは…。オリ・パラが必要としているボランティアの役割や募集計画を確認し、開会までに必要と思われる準備や取り組むべき 課題について考えます。

開催日時

2月10日（金）19:00～21:00

参加者数

44名（参加者36名、出演者2名、スタッフ6名）

出演者

嘉藤一仁さん　公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会
総務局ボランティア推進部ボランティア推進課ボランティア推進チーム主事

関　直美さん　一般社団法人日本ボッチャ協会東京事務所事務局長

内容・成果・課題

事務局よりオリンピック・パラリンピックの歴史を解説し、1964年の東京オリンピックにおけるボランティア活動の状況などをNHK 厚生文化事業団から提供していただいた当時の映像を見ながら説明しました。前回の東京オリンピック・パラリンピックでは一般のボランティアは公募されず自衛隊や警察、公務員などで運営が賄われ、通訳や競技の専門的分野などでボランティアが活躍していたことを知りました。また、オリンピックが日本の戦後復興期における大きな転換期となり、パラリンピック開催によって障がい者に対する人権意識が急速に高まるなど日本にとって大きな歴史的出来事だったことを理解しました。ボランティアという言葉が広く一般的に知られるようになったのも前回の東京オリンピック・パラリンピック開催がきっかけとなりました。

組織委員会の嘉藤さんよりロンドンやリオデジャネイロでのボランティアの取り組みなどを踏まえて2020東京オリンピック・パラリンピックでのボランティア計画の概要について説明いただきました。公式ボランティアは組織委員会が公募する競技会場などで観客サービスや協議運営サポート、メディアサポートなどを行う大会ボランティアが9万人と東京都が公募する空港や観光地などで旅行者などのサポートを行う都市ボランティアを3万人程度募集する予定とのことでした。また、公式ボランティアは3回の事前研修参加と1日8時間で10日間（パラリンピックは5日間）の活動を行うことが求められ、活動場所までの交通費や宿泊費などは個人負担、2002年4月1日以前に生まれ、日本国籍または日本に滞在する在留資格を有する人が応募できるとのことでした。

参加条件は少し厳しく感じられるかもしれませんが、一生に２度とないオリンピックという歴史的大会に主体的に参加して大会を盛り上げることを前向きに考えてほしい、ロンドンやリオデジャネイロで

は定員を大きく上回る応募があって、外国からの参加も少なくないと思うのでこのチャンスを生かしてほしいとお話いただきました。

日本ボッチャ協会の関さんからは競技団体としてパラリンピックに参加する取り組みについてお聞きすることができました。ボッチャはリオデジャネイロパラリンピックで日本が銀メダルを獲得したことで関心が高まった障がい者スポーツで東京大会では活躍が期待されています。パラリンピックの競技においては公式ボランティアのサポートを受ける予定で協会としては特に一般からボランティアを募集する予定はないとのことでした。ただ、パラリンピックで世界からの一流選手が集まる機会を活かしてボッチャをPRするためのイベントなどを開催することなどが考えられ、競技団体としてお手伝いをいただくボランティアをお願いすることになると思うと話されました。ボッチャだけでなく障がい者スポーツはまだまだマイナーなものも多く、各競技団体がいろいろと計画すると思うので公式ボランティアに参加することが難しい人でもインフォーマルなボランティア参加の方法もたくさんあるのではないかとのことでした。

参加者の声（アンケート結果などから）

オリンピック・パラリンピックのボランティアにぜひ参加してみたいと思った。

パラリンピックの競技の種類などもう少し具体的な説明がほしかった。

企画・運営

枝見　太朗（富士福祉事業団）【主担当・報告書】

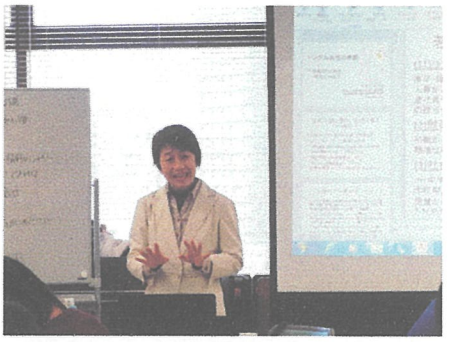
鈴木　正昭（りすこ（おおた復興支援活動連絡協議会））

若井　俊一郎（NHK厚生文化事業団）

０５　シングル女性の貧困～社会のしくみを考えてみよう～

開催目的

近年「子どもの貧困」が世間で注目されていますが、貧困問題は子どもだけではありません。女性の貧困、その中でも「シングル女性の貧困」については、まだ世間で広く認知されていないのではないかと思い、今回企画しました。男女平等と謳われる世の中ですが、未だ女性の地位が低いことから男女で収入格差があること、女性は結婚して養ってもらえばいいという声があること、非正規雇用で働きたくても働けない、働くことに不安や悩みを抱えている女性がいるという現状があります。市民のみなさんに、日本社会の現状とその仕組みを理解してもらいたいと思い、分科会を開催しました。



開催日時

２月１０日（土）10:00～12:30

参加者数

３９名（参加者３１名、出演者１名、スタッフ７名）

出演者

小園　弥生さん（男女共同参画センター横浜南　管理事業課長）

横浜市の女性センター（現在は男女共同参画センター）を管理運営する現法人に、1993 年に就職。それ以来 25 年間、自助グループ支援、女性の就労支援、調査研究等に携われてきました。市民活動として「働く女性の全国センター」運営委員、「働く女性の全国ホットライン」のボランティアとしても活動されています。

内容・成果・課題

【内容】

１小園弥生さんのお話

1）シングル女性の貧困って？社会構造の観点から

シングル女性というとシングルマザーを想像する人もいるかもしれませんが、シングル女性とは単身の女性のことです。なぜ、シングル女性の貧困が存在するかというと、男性が稼ぎ主をモデルとする古い社会保障制度が今も残っているからです。つまり、女性がシングルで生きることが想定されていないのです。家事や介護、育児などのジェンダー役割があることや、介護・保育などの低賃金のケア労働は女性の仕事という性別職務分離が、日本には未だに残っています。こういった社会のしくみが、女性の低賃金を生み出します。

また女性の貧困が進んでいる理由として、「労働からの排除」と「家庭からの排除」があげられます。1985 年以降、働く女性は増加しましたが、その多くは非正規雇用・低賃金で働いています。セクハラやパワハラの対象にもなりやすいです。また、結婚しない人が急増し家族が形成されない、あるいは家族の中でも虐待やネグレクト、暴力にさらされるといったことが原因の１つです。

2）シングル女性の貧困の支援現場について

男女共同参画センターでは、女性特有の課題解決、グループ型支援を得意として支援を行っています。男女共同参画センターの役割として、心身と性に対する自己尊重感を高め女性が働くイメージを

もてるようにしていくこと、個人の問題ではなく社会の問題として発信していくことがあげられます。現在、男女共同参画センター横浜南で行われている、若年女性支援や就労に関する講座、就労体験等から、支援現場では就労のみを支援するのではなく、女性たちが経済的・精神的に安定・安心して生活できるようにサポートしていくことが大切であるということを参加者のみなさんと共有しました。

２グループワーク

シングル女性の貧困の社会構造のしくみと、支援現場のお話を聞いて、「シングル女性の貧困について、何から考えればいいか？また、どうすれば一歩踏み出すことができるか？」をテーマにグループワークを行いました。

【成果】

まだ認知度が低いシングル女性の貧困についてお話を聞き、改めて日本社会の社会保障制度や昔からの根強い考え方などを考える機会になったと思います。グループワークでは、「シングル女性の貧困について今まで知らなかった。まずは知ることが第一歩だと思う。」「シングル女性に対しての社会保障や制度が少ないことが分かった。相談の入り口の確保や当事者が集まることのできる居場所の工夫が必要であると思う。」などの意見がありました。参加者それぞれが、普段の生活から感じていること、他の参加者のお話を聞いて気づいたこと、無意識に私たちの根底にある文化の先入観や違和感を共有できました。参加者は、学生から社会人まで幅広い層であったことから、世代によって異なる考え方を共有できたのはよかったと思います。また、男性の参加者も想像していたより多く、男性も女性も「シングル女性の貧困」を考えることができたと思います。

【課題】

シングル女性の貧困の現状について知り、共有できた一方で、シングル女性の貧困というのは、自己責任ではなく社会の問題であることから、制度がなければ自分たちができることは限られるのではないか、まずはシングル女性に関する社会制度の確立や、予算の担保、地域の資源（窓口等）をもっと増やすべきだという意見もあり、これは今後の日本社会の課題です。また、女性の貧困といえばシングルマザーを想像する方が多く、シングル女性のイメージが浮かんでこないという声もありました。これは、まだ世間に広く認知されていない証拠とも言えます。この分科会をきっかけに、多くの人に知ってもらい、自己責任ではなく社会の問題であること、また女性が自己肯定感を持てるような社会になればいいなと思います。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 今までぼんやりとしたイメージだった女性の貧困が少しはっきりしたような気がしました。貧困は経済面だけではないということが、とても印象的で注目すべきだと感じました。
- この機会を通じて女性の就労支援の存在があること等、学べることがたくさんあり、大変貴重な時間を過ごすことができました。これをきっかけにより学びを深められたらと思います。

企画・運営

増永　めぐみ（日本社会事業大学）【主担当・報告書】

圓藤　理江（一般社団法人インクルージョンネットかながわ）

神元　幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）

杉村　郁雄（NPO 法人日本ファシリテーション協会）

06　地域活動への若者参加の可能性を探る

開催目的

地域活動において、若者にもっと参加してほしいという声をよく聞きます。地域活動は、地域住民による活動ですが、地域住民とは定住者を意味していることが多いです。ですが、若者の多くは定住するか決めずに（大学への進学や仕事の転勤などの理由で）引っ越してきた“一時的”な住民であり、その時点では定住者ではありません。

担い手不足など若者を巻き込めないことに苦労していることが多い地域活動において、この仮暮らしとうまく向き合っていくことが、若者の地域参加を促し（更には、その仮暮らし者の定住の可能性も含め）地域活動を活性化させる可能性を秘めていると考え、その観点から地域活動の今後の在り方について考えていきたいと思います。

開催日時

2月11日（土）10:00～12:30

参加者数

26名（参加者18名、出演者3名、ボランティア1名、スタッフ4名）

出演者

田中　洋さん（認定NPO法人サービスグラント プロボノワーカー）

荒井　聖輝さん（しぇあひるずヨコハマ プロジェクトマネージャー）

三文字　昌也さん（NPO法人街ing本郷 書生生活メンバー）

内容・成果・課題

出演者3名から事例紹介をして頂き、最後に出演者も交え「事例紹介から気づいた、各地域で実践できること」というテーマで、ワークショップを行いました。

＜事例紹介＞

1．認定NPO法人サービスグラント

プロボノとして活動された、館ヶ丘団地での活動をお話しして頂きました。「信頼」、「規範」、「ネットワーク」で構成するソーシャルキャピタルによって、地域が活性化するとはどういったことかを定義して頂きました。

この定義によって、この後2名の事例紹介がより理解しやすくなりました。

2．しぇあひるずヨコハマ

人口減少・少子高齢化といった社会構造の課題、高齢者の一人暮らし率の上昇などライフスタイルの課題、都市開発により経済合理性を優先することにより分断され住民同士の顔が分からないといったコミュニティの課題、増え続ける空き家といった物件の課題、日本が直面する多くの課題をまずは共有し

て頂きました。その中で、空き家をリノベーションして、拠点を活用して多くの人を巻き込み、地域活動を活性化させた事例を紹介して頂きました。

「暮らすこと＝寝る場所」ではなく、社会的関係性が住まいにも必要であり、徹底的に面白がることや家族・入居者・仮暮らし者（若者）と生活時間を共有すること、競争原理社会から共創原理社会へシフトチェンジしていくことが重要ではないかとメッセージを頂きました。

3．NPO 法人街 ing 本郷

文京区本郷（地区）にて、街・人をつなぎ「元気ある街づくり」を行われている NPO 法人街 ing 本郷の活動の中で、書生生活という若者を格安の家賃で住んでもらう代わりに、地域活動に参加してもらう活動を紹介して頂きました。

地域活動へ若者参加を促す重要なポイントとして、「この人に言えば、何か始まる」という人が地域にいることが大切で、その地域にキーパーソンがいるかどうかが重要という話も頂きました。

地域活動において、リソース（例えば、公民館や空き家）をシェアしていくことが多くの人を巻き込んでいく仕掛けとなり得ることが成果としてみえましたが、所有者にこの意義をどう伝えていくかが次の課題だと感じました。また、若者を巻き込んでいくために、地域にキーパーソンが必要ということも見えてきましたが、その人物をどう育てていくかが次の課題だと感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 刺激的な事例発表が多くとてもおもしろかったです。仕事をしていると、地域での若者のニーズはありますが、若者がボランティアしたいと思うしかけや呼びかけについてきちんと考えるべきだと思いました。
- 若い人たちの力はすごい。そうした力を十分に活かす環境を作るのが年寄りの役目ですね。
- 若い人たちの参加が、他の世代の人の参加をしやすくすることにつながるということ。楽しいこと、ちょっとしたことを自由にできる場、機会を設定すれば参加が広がっていくということ。様々な貴重なお話ご意見いただけてとても勉強になりました。

企画・運営

直井　友樹（NPO 法人 NICE）【主担当・報告書】

市川　徹（株式会社世田谷社）

小原　恵美（株式会社メディステップ）

０７　コーディネーターって何だろう？
～多様な社会課題の、その中で～

開催目的

社会や地域の課題に取り組む人を支えたり、つないだり、調整する役割として、様々なコーディネーターが地域で活動しています。社会課題が多様化する中で、ボランタリーな活動や市民活動が期待される今、同時にコーディネーターの役割も広がりつつあります。課題を取り巻く環境の中で、市民の力がより良いかたちで発揮されるためには、どのように働きかけていけば良いのでしょうか。出演者の事例や参加者同士の意見交換の中から、多様な視点やそれぞれの「大切にしたいこと」を共有し、これからの可能性を探ります。

開催日時

２月１０日（土）10:00～12:30

参加者数

４４名（参加者３７名、出演者３名、スタッフ２名、ボランティア２名）

出演者

飯野　加代子さん（社会福祉法人北区社会福祉協議会　コミュニティーソーシャルワーカー）

橘　たかさん（合同会社橘　まちづくりコーディネーター）

宮崎　雅也さん（日野市ボランティア・センター　ボランティアコーディネーター）

内容・成果・課題

【内容】

まず始めに、異なる分野・フィールドでコーディネートを行う出演者から自己紹介として、それぞれの特徴的な事例を写真とともに伺いました。「市民とのかかわり／働きかけ」「関係機関とのかかわり／働きかけ」「担い手づくり」「しくみづくり」の４つのテーマでグループワークを行い、最後に各グループのまとめを全体で共有し、出演者からコメントをもらい終了しました。

<グループワークで話し合われたこと>

- 地縁組織の多くが高齢化している一方で、地域課題の多くがボランティアに頼らざるを得ない現状がある。新しい住人や若い世代が参加できるよう、活動を見直したり、それぞれの考えや大切なものを共有できるような環境づくりに、コーディネーターが力を発揮したい。

・自分に何ができるかわからない・助けてほしいけれどどこに相談してよいかわからない、つながりたい団体・企業など潜在的なものもある。誰もがアクセスできるポータルサイトがあるとよい。

・趣味活動は比較的参加が多い。それを生してもらえるような活動の提案ができるとよい。どこにどんな特技・技術をもった人がいるか、情報集めや発信が必要。

・役割の担いやすさに注目。既存の担い方だけでなく、年齢やライフステージに合わせ担い方の提案。

・様々な情報とニーズを把握し、その両者をつなげる人はどこにいるのか。地域には、コーディネートできるの素質のある人がいる。コーディネーターが、そうした潜在的な人を引き出して、つながっていけるとよい。

＜出演者から＞

飯野さん

日頃から相手を知るということを一番にしている。困りごとを抱えた人だけでなく、活動したい側にもニーズがある。双方がウィンウィンになる関係性を心掛けている。困りごとの相談に来た住民の方が、地域のサロンに参加し、今では職員に代わって地域でサロンなどの宣伝をしてくれるよな事例もある。コーディネーターが思い描いたような人でない人が、地域や活動にとって必要な人になることもある。

橘さん

若い人、新しい人に参加をしてもらうために、入りやすい入口があると良い。たとえば、「お試し参加」。参加の前にまず知ってもらおう、と提案をしている。忙しい中でプライオリティーをどれだけあげてもらえるかも重要。ちょっと楽しいことがある、会いたい人がいるなど。コーディネーター自身がちょっと会いたい人になれるといいと思う。

宮崎さん

被災地の活動や防災の活動する中で、人のつながりは人が生きていく中で重要なことだと思う。コーディネーターが色々なところでゆながりをつくっていけたら。地域にもコーディネートを担う人がたくさんいる。いろいろな人と仲良くなって、応援してもらい一緒に取り組めると良い。

【成果と課題】

中間支援組織や団体内でコーディネートを担うスタッフの参加が多くありました。共通する課題も多く、分科会内では解決まで至りませんでしたが、分野や地域性、組織の文化が違う参加者同士、それぞれの考え方や想いを共有することができました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・日頃狭い範囲で物事を考えがちだが、様々な立場の方の話しを聞けて、視点や考えた方が広がった。

・皆さん、それぞれいろいろな考え方があって、いろいろなことがある話をたくさんきくことが出来ました。参加された皆さん、３名のコーディネーターの経験をふまえたまとめの話すごく参考になりました。様々な立場やフィールドでボランティアに関わる方々と意見交換の場が持てて有意義な時間でした。

・それぞれ立場の違う方と課題を話すことができて良かったです。解決までにはいかないまでも共有出来て意義があったと思います。

企画・運営

志田　五十鈴（狛江市市民活動支援センター）【主担当・報告書】

髙橋　義博（府中市民活動支援センター）

０８　エシカル消費って何だろう？
～世界が続くためにできること～

開催目的

最近、耳にするようになった「エシカル消費」。直訳すれば、「倫理的消費」となり、環境、社会、人権などに配慮した製品やサービスを選ぶ消費行動を意味します。この分科会では、日々の暮らしとは切っても切れない関係にある、買い物などの消費活動を通して、持続可能な社会をつくるために、私たちができることを考えます。

開催日時

２月１０日（土）10:00～12:30

参加者数

１４名（参加者８名、出演者１名、スタッフ５名）

出演者

古谷　由紀子さん（サステナビリティ消費者会議代表）

内容・成果・課題

1.古谷さんのお話

1）消費の現状とエシカル消費（倫理的消費）

今どんな消費が行われているでしょうか？世界中の様々な商品・サービスを入手し、消費できるようになりました。一方で、生産過程や消費後の廃棄過程が消費者からは見えにくくなり、物のライフサイクルを通じた社会や環境に対する負担や影響を意識しないまま、大量に消費が行われています。このままの消費を続けると、 地球温暖化や資源の枯渇による生活環境の激変あるいは価格の上昇といった形で消費者に影響を及ぼします。また、途上国の人々の生活や労働者への人権侵害も起きてくるのです。

今日の社会的課題には、消費者の行動なくしては解決し得ないものが増えています。二酸化炭素排出量のうち15.8%が家庭部門から排出されていますし、食品ロスについては、半分近くが家計から排出されています。事業部門から排出されるものの中には消費者の過度な鮮度志向により賞味期限前に廃棄されるものもあります。倫理的消費を考え、実践することで、消費者が「安さ」や「便利さ」などに隠された社会的費用を意識することにつながり、倫理的消費に誠実に取り組む事業者を市場に残すことにつながるのです。

2）持続可能な社会に向けて関係者の取組み

今日のテーマは消費者ですが、持続可能な社会のために、様々な人達が頑張っています。法律などを整備するのは政府の役割です。企業は、環境負荷の少ない商品、労働者など人権配慮の商品、海や陸の資源を保全した調達、公正な貿易など持続可能な商品・サービスを提供します。また、消費者団体、NPO・NGO、労働組合などの市民組織の取り組みとしては、問題を知らしめたり、抗議や対話によって改善要求をしたりということが挙げられます。そして、消費者の行動として、エシカル消費の実践が大事です。ライフスタイルの見直しも大切です。

3）エシカル消費とは

それではエシカル消費とは具体的にはどのようなものを意味するのでしょうか。一般的には「持続可能な社会をつくるために、環境、社会、人権などに配慮した製品やサービスを選び、消費する行動」がエシカル消費と言われ、消費者庁のとりまとめの定義では、「倫理的消費とは、突き詰めれば、消費者それぞれが、各自にとっての社会的課題の解決を考慮したり、そうした課題に取り組む事業者を応援したりしながら、消費活動を行うこと」とされています。

それでは消費にあたってどのような配慮が必要でしょうか。「人への配慮」として、障害者支援につながる商品等の消費、労働者の負荷を減らす消費、「社会への配慮」として、フェアトレード商品や寄付付きの商品等の消費、「環境への配慮」として、エコ商品、リサイクル製品、資源保護等に関する認証がある商品等の消費。「地域への配慮」として、地産地消や被災地産品の消費。ほかにも、動物福祉（アニマル・ウェルフェア）を実現する消費、 複合的な要素を持つものとして、「エシカルファッション」が考えられます。

さて、ほかにはないでしょうか？身近な生活で考えてみると、宅配便の再配達防止、 携帯・スマホの希少鉱物の問題、 プラスチックの使用・消費、用紙の使用・消費、 ウナギの消費など、事例はいくつもあり、これらのたくさんの場面でエシカル消費の実践が求められているのです。

4）消費者の意識・行動の変革へ

サステナビリティ消費者会議では、消費者はどんな役割を果たせるのかの参考として、『持続可能な社会の実現へ　消費者のよりよい選択のためのアクションガイド』（https://ccfs2014.jimdo.com）を作りました。そこでは、 「生活の中でできること」「企業に聞いてみよう、お願いしてみよう」「ともにできること」に分類して消費者の行動を示しています。

5）消費者を支援する

消費者の意識・行動の変革を促すためには支援が必要です。消費者はエシカル消費を実践するための知識・情報が不足しているからです。企業などの広告などからも影響も受けていることから、多様な主体による情報提供による消費者支援が欠かせません。

国際的な消費者団体「コンシューマーズインターナショナル」では、「知識ある消費者」にも責任がある、と言っています。問題があることを知った消費者が、周りに伝えていくということも大事ですよということなのです。本日学んだ皆様も「知識ある消費者」と言えるでしょう。

2.グループワークとまとめ

３つのグループに分かれ、グループごとにエシカル消費について、関心があることやその問題、また、できることなどを意見交換しました。その後、参加者全員に、感想や今後していきたいことなどについて、話をしていただきました。

古谷さんからは、国連のSDGs（持続可能な開発目標）を実現するうえでも、持続可能な生産・消費は大切であること、また消費者などステークホルダーはESG投資を通して投資家との対話を始め、持続可能な社会にインパクトを与えようとしていることなどお話しいただきました。最後に、決して正義感では続かないので、自分にとっても、周りにとってもよいエシカル消費をやっていただきたいとまとめていただきました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・企業人である前に消費者なので消費者の視点で企業活動を見ていきたい。エシカル消費の表示が課題と思います。具体的な表示の方法を検討していきたいと思います。

企画・運営

鹿住　貴之（認定NPO法人JUON（樹恩）NETWORK）【主担当・報告書】

０９　フィールドサインから読み取るまちの声
みんなでつくる「地域観察術」

開催目的

フィールドワーク（町歩き）を通じて、歴史や地理、住民といった様々な視点による町、地域の魅力を発見し、様々な活動のきっかけづくりとする。

開催日時

２月１０日（土）10:00～16:30

参加者数

２４名（参加者１４名、出演者５名、スタッフ５名）

出演者

小林 佳太（北区社会福祉協議会）

保垣 孝幸（北区立中央図書館地域資料専門員）

鈴木 將雄（東十条３丁目町会 会長）

榎本 龍治（十条銀座商店街振興組合 事務局長）

加藤 勉（特定非営利活動法人 日本防災推進機構 理事長）

内容・成果・課題

成果については、アンケートの声に寄せられているように、多くの気づきを得られたことが一番です。大人数、様々な立場の人々が同じフィールドを歩き、観察し、意見するというフィールドワークの基本を忠実に押さえられました。そのうえで、住民、歴史家、商店主等、街を構成する諸立場の方々からの意見・情報を加えることにより、街歩きで表面上見えた以上の町の魅力、町と恋に落ちる視点を持って帰っていただけたと考えています

初企画であったため、フィールドワークの時間配分や意見交換の時間の短さ等の課題は残りましたが、おおむねよい企画となったと思います。ご参加いただいたみなさん、出演者のみなさんありがとうございました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 歩いてゆっくりみられて楽しかった。町のみかたが変わりました。町は住んでいる人の希望だけではなくいろいろな思わくがあるんだなと思いました。工場が多くあってのおいしいものが人が多く集まっておいしいものも生まれるんだなと思いました。
- 街を歩いて"感じる"ことが大切かなと思っていますが視点を考えて歩い たことで感じ方が変わるかもしれません。人数は多すぎる。半分にして２ 部制にするか２班に（危険、歩くスペース、説明が聞こえない）わけるなど ご一考を。あと「街歩き」と「フィールドワーク」の伝える側の整理が必要か？おもしろい企画だと思うので深めてよりよい企画に！！ありがとうございました。
- フィールドの途中で、専門的な意見が聞けるのが良かった。せっかくなの で、フィールドでそれぞれが持ち帰ったことを発表するだけではなく、もっと時間をかけて言葉で深くシェアしたかった。

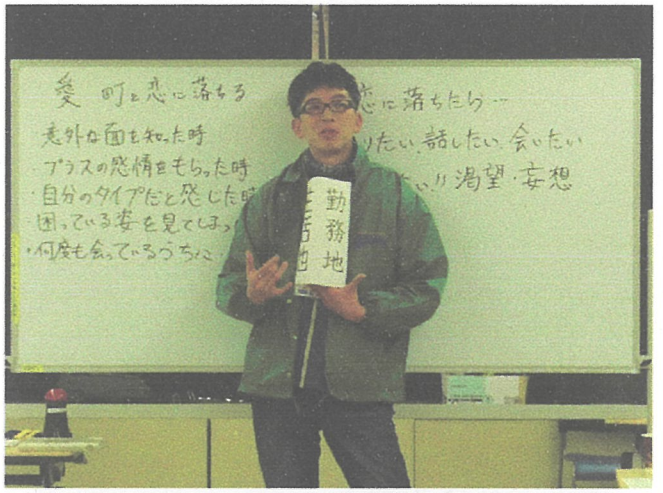
企画・運営

石川 次郎（中間支援団体 L.V.アップ）【主担当・報告書】

斎藤 ひかり（東京家政大学）

福田 絵里佳（北区社会福祉協議会）

当日の様子等



オリエンテーション ～まちを多面性について～

鈴木 將雄氏 ～特製の資料で地域史の説明～

保垣 孝幸氏 ～町に残る富士信仰の遺構について～

榎本 龍治氏 ～十条銀座商店街と昔と現在～

１０　ともに生きる社会へ～多様性を認め合い、ゆるやかにつながる～

開催目的

互いの存在を認め合い、頼り頼られながら、だれもが自分らしく、ともに生きることのできる社会を、私たち自身がつくっていくことについて、知ること、想像すること、出会うことから、一緒に考えます。

開催日時

２月１０日（土）14:00～16:30

参加者数

37 名（参加者 28 名、出演者４名、ボランティア２名、スタッフ３名）

出演者

大戸 優子さん（社会福祉法人ききょう会 いちはら生活相談サポートセンター センター長・主任相談支援員）

千葉県市原市生まれ。市原市社会福祉協議会でボランティアコーディネーター・福祉教育・福作業所指導員の職に従事し、知的障害者入所更生施設、千葉県社会福祉協議会を経て、現法人に入職。中核地域生活支援センターいちはら福祉ネット所長兼地域総合コーディネーターを務め、2015 年より現職。千葉県生活困窮者自立支援実務者ネットワーク会長、市原市総合計画審議会委員、市原市障害者介護給付審査会委員、市原市バリアフリー推進協議会委員、NPO 法人ちばこどもおうえんだん理事。

白江 香澄さん（ＮＰＯ法人ふらじゃいる 事務局／陽和病院 ＰＳＷ）

佐藤 寿雅さん（ＮＰＯ法人ふらじゃいる 副理事）

藤田 知佳さん（ＮＰＯ法人ふらじゃいる）

練馬区にある、精神障がいなどを抱えた仲間を中心とする団体。当事者研究（※）ミーティングをはじめ、ワークショップやコミュニティカフェ、講演活動を通じてあらゆる方と交流を持ち、障がいにとらわれず、楽しく安心して生活する知恵や方法を模索しながら活動している。

※当事者研究…1970～80 年代、欧米諸国で、精神病院の中だけでの治療をやめて、地域での治療やケア、リハビリテーションをもっと進めていこうという流れが生まれる中、日本では、北海道にある精神障がい者の団体「浦河べてるの家」が、専門家による治療だけでなく当事者同士による相互治癒を提唱し始めた。浦河べてるの家で生まれた「当事者研究」プログラムは、専門家の知識や技術よりも、当事者たちの経験の中にこそ病気や苦労を解明する知恵が眠っていると考える。現在、このプログラムは海外にも拡がり、その効果が認められている。

内容・成果・課題

（1）大戸 優子さんからのお話

・相談の現場で、複合的な問題を抱える家庭、キーパーソンが身近にいない人、制度の隙間に落ちてしまう人、虐待や権利侵害を受けている人など、地域の中で「孤立」「排除」の状態にいる、さまざまな人に出会ってきました。

・お金、時間、配慮、経験、情報、居場所がないことが「排除」を生み出しています。その背景には、本人や地域の経験の少なさや未熟さ、本人の自尊心の低さ、地域性や文化の違い、障がいや病気によるコミュニケーション能力の不十分さなどがみえます。生きづらさがあっても、機会や経験の不足から、自分に起こっている課題に気づくことができず、解決することを諦めてしまっていることもあります。

・具体例を考えていくと、身近なところにも、いろいろな「困っている」人がいることに気づくのではないでしょうか。ＳＯＳを出せずに課題を抱えている人もいるかもしれません。

・自分にも他者にもいろいろな「顔」があり、そうした多様な人たちが地域の中にはたくさんいます。

（2）白江 香澄さん・佐藤 雅寿さん・藤田 知佳さんからのお話

・当事者研究では、自分の今抱えている悩みや弱さを「苦労」として受け止めて、どう対応していけばよいか、みんなが自分事のように一緒に考え、模索していきます。

・ふらじゃいるでは、メンバーは思ったことはそのまま口に出して、自分の考え・価値観として相手に伝えています。違う意見が出ても、そうなんだと真摯に受け止めることで信頼関係が深まり、メンバーの特性を個性として認め合うことで、素の自分でいられる居心地のよい居場所になっています。

・地域で活動していく中でつながった、顔の見える関係の中で、力を貸してもらいながら、少しずつ団体として進んできました。

・（藤田さん）これまで、自分がうまくやれないだけ、自分の感じ方や価値観が人と違うことが悪いとしか考えられませんでしたが、ふらじゃいるに参加して「発達障がい」だと気づくことができ、人とうまくやれなかったことに理由があったと知って、すごくほっとしました。

この体験から、自分の「苦労」の理由を知ること、障がいの可能性に気づき、よい意味で軽く考えて、隠すのではなく周知していくことが大事だと思っています。

・（佐藤さん）人を差別的に見ないメンバーたちと、仲間としてフラットな関係でつき合っています。「苦労」を持つ人がその苦労とともに生きること、それを研究していることに魅力を感じています。

一家離散して一人で生きていかなければならなくなった中、ホームレスの仲間に、野良猫に、ビッグイシューの人たちに出会いました。統合失調症を発症して入院し、主治医に、デイケアで白井さんに、グループホームで世話人さんに出会いました。一人だったのが、自然な流れの中、要所要所でいろんな人に出会い、助けられて、こうして生きてこられたと思っています。

「多様性を認め合い、ゆるやかにつながる、ともに生きる社会」の実現のヒントは一人ひとりが持っています。それをつなげ合い、支え合いながら生きていければ、素晴らしい社会になると思います。

・（白江さん）活動では、支援者としてではなく、一市民としての感覚を大事にしています。

ふらじゃいるのような団体がたくさんあればよいということではなく、多様性が認められるのであれば、それに見合った多様な場があればよいと思います。一つの価値観に偏ることの方が危険で、いろんな選択肢に溢れ、さまざまな変化を認め合えるような社会であればよいと思います。

（3）グループディスカッション

・「どんな地域だったら、だれもが自分らしく、暮らしていきやすいと思いますか？ そんな地域にしていくためにできることは？」についてグループで話し合い、発表しました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・自分と違った価値観に触れられて、いろんな人の考えを聴くことが大切だと気づくことができました。

・生きづらさをパワーに変えて、自分らしく生きていく姿に感動を覚えました。

・違いがあるから素晴らしいと、一人ひとりの違いを認め合える場所があったらいいなと思いました。

企画・運営

圓藤　理江（一般社団法人インクルージョンネットかながわ）【主担当・報告書】

粟澤　稚富美（公益財団法人社会教育協会ひの社会教育センター 子育てカフェ「モグモグ」）

神元　幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）

杉村　郁雄（ＮＰＯ法人日本ファシリテーション協会）

増永　めぐみ（日本社会事業大学）

１１　災害時の困り事～性的マイノリティ(ＬＧＢＴ)の視点から～

開催目的

災害時に女性の視点を取り入れること、配慮が必要な人がいることについては少しずつ認識が広まっています。しかし、性的マイノリティ（LGBT）に関しては社会的偏見もまだまだ多く、地域で避難所運営などを中心的に行う自主防災組織もどう対応したらいいのか分からないのではないかと思います。本分科会では、過去の被災地での事例から、災害時の性的マイノリティの方の困り事を理解すると同時に、町会や自主防災組織が主となる地域防災の課題も取り上げ、１人でも多くの理解者がいざという時に当事者とともにどう災害に向きあえるのかを考えることを目的に開催しました。

開催日時

２月１０日（土）１４：００～１６：３０

参加者数

２０名（参加者１５名、出演者１名、スタッフ４名）

出演者

山下　梓さん（岩手レインボー・ネットワーク、弘前大学 男女共同参画推進室）

講師プロフィール：

学生時代から性的マイノリティ（LGBT）の人権問題に取り組む。東日本大震災では、震災直後に「岩手レインボー・ネットワーク」を設立。LGBT に理解のある避難所や支援情報の発信を行う。

内容・成果・課題

東日本大震災以降、地域防災が大きく変化してきており、災害時の対応の多くを地域住民が担うようになってきています。初めに地域防災の課題、今後求められる地域防災について全体で共有しました。

山下さんからは、性的マイノリティを考慮するにあたっての言葉の定義をまずお話しいただきました。その後、東日本大震災で当事者が直面した困り事についてお話いただきましたが、大切なのは、普段からつながっていないと大変な時にも困り事の相談はこない、ということです。これら災害時の困り事は「にじいろ防災ガイド」としてまとめられています。発災直後・避難器、復旧・復興期での困り事に対する対応策、普段から用意しておきたいものなどが記載されています。ホームページからも入手できるので、関心のある方はぜひご覧ください。

山下さんの話を伺った後は、グループごとに性的マイノリティの方に必要な配慮、それに対して自分自身ができること、自分にはできないけど必要なこと、対応できる人は誰か、を話し合ってもらいました。相談しやすい環境を作る意味での「レインボーフラッグ」の活用、ユニバーサルトイレの設置、個

別シャワーの対応、平時の研修、普段から性的マイノリティについて話せる雰囲気作りなど多様な案が出ていました。避難所に支援に入ったボランティアが、避難所にいる当事者のことを差別的に捉えたり、応急仮設住宅で当事者のことが噂になり、その方が仮設住宅に居づらくなったという事例も聞かれたことから、被災者だけではなくボランティアについても送りだす時のオリエンテーションの必要性、性的マイノリティ（LGBT）当事者のボランティアへの配慮についても意見が出ていました。

LGBT アライになる、という意見もありました。アライとは性的マイノリティ（LGBT）ではないけれど LGBT の人たちの活動を支持し、支援している人たちのことです。一人でも多くの方がアライとなり、それを見える形で表明することで、災害時に関わらず安心して話し合える関係になるのではないかと思いました。

最後に、参加者の意見を聞いた山下さんからは、このように議論する場が大切であること、何がして欲しいかは一人ひとり異なる。だからこそ、本人に直接聞くことが大切だとのコメントをいただきました。社会的偏見は根強いかもしれませんが、性的マイノリティ（LGBT）の困り事に気づいた一人ひとりが態度で示しアクションを起こしていくことで、少しずつ変わっていくのではないかと感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- 災害時における性的マイノリティ（LGBT）への配慮などを知ることができた。
- これまで外国人への対応や高齢の方、障がいのある方への対応について考えたことはありましたが、LGBTI の方への配慮が必要だという事は初めて知りました。
- 柔軟な思考が大切だと思いました。
- 大変深い学びになりました。地域で身近にできることを真剣に取り組みたいと思います。
- 女性と子どもの一時避難所を開設する際に、LGBTI の人をどう受け止めるかが課題になっていたため参加したが、LGBT について具体的に理解できたと思う。

企画・運営

神元　幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）【主担当・報告書】

直井　友樹（NPO 法人 NICE）

小原　恵美（Community Nurse Company(株)）

１２　シニアを呼び込むプログラムの作り方

開催目的

現在は 65 歳以上の人を「高齢者」や「シニア」と呼んでいますが、人生 100 年時代と言われ、シニアにもっと活動に参加してもらいたいと思う団体、中間支援組織の方も多いのではないかと考えました。どうすればプログラムにシニアの方が興味を持ったり協力してくれるのか、その疑問や悩みを、実際にシニアの方が多く活動している団体や、当事者からの事例や工夫、思いをご紹介することで、気づきや発見の機会にしていただき、参加者により魅力的な活動やプログラム作りに活かしてもらいたいと思い企画しました。

開催日時

２月 10 日（土）14：00～16：30

参加者数

33 名（参加者 24 名、出演者４名、スタッフ５名）

出演者

高橋　知也さん（東京都健康長寿医療センター研究所・社会参加と地域保健研究チーム）

上野　佳志子さん（特定非営利活動法人ジービーパートナーズ理事・事務局長）

松本　敏夫さん（東京シニア自然大学）

内容・成果・課題

【内容】

・シニアの方を活動に巻き込むポイントやコツについて、研究者の視点、シニアの方々と関わりを多く持った事業を行っている事務局からの視点、活動をしている当事者からの視点という、立場の異なる３名から、話をしていただきました。話を聞いた後、参加者にはワークシートに取り組んでもらい、シニアを呼び込む魅力的なプログラム案を個人で考えてもらいました。最後に、参加者が自身の活動に持ち帰り活かすことができるよう、ワークシートの内容を各グループ内で共有したり講師からもアドバイスをうけ、プログラムのイメージをより具体化してもらいました。

＜お話のポイント＞

1．高橋　知也さんからの話

・シニアの趣味やレジャーの好みは、時代の変化とともに変化しています。時代に合わせたプログラムの構成、コンテンツの選択が重要です。

・歩行や認知機能などのデータから、現在の高齢者は 10～20 年前に比べ 5～10 歳若返っているといえます。さまざま活動ニーズや意識を持つ、心身ともに若いシニアが増加しています。

・活動のきっかけと活動継続のモチベーションが同じとは限りません。シニアが活動に参加し続けたいと思えるよう、変化する活動ニーズへの対応が重要です。

2. 上野　佳志子さんからの話

・介護や自身の体調、孫の世話等、忙しいシニアが増えている。関わりが切れてしまわないよう、来た人は離さないような工夫をしています（現在実動していなくても飲み会には誘うなど）。

・団体の活動メンバーになってもらう上で大切な決め事は、先に話しておきます。後出しはしません。

・「シニア」には厳密な定義はなく、多様化しています。人によって身体的なものや考え方、ライフスタイルなどに個人差が出てくるし、その個人差は大きいです。

3. 松本　敏夫さんからの話

・ボランティア活動のきっかけは、自分がぬれ落ち葉にならないよう、社会との関わりを持ちつづけたいという思いからです。興味や希望にあった内容のボランティア募集を見つけ応募しました。

・楽しくないと続きません。活動のやりがいや、仲間との喜び、達成感があることで、継続の意欲が湧きます。また、活動場所へのアクセスの良さも継続のポイントの一つです。

・ボランティアであっても成果が求められる場面が見受けられます。また、できる人やリーダーに負担がかかり、なり手が少ない現状があります。

【課題】

・シニアと一言で言っても、能力、体力など個人差が大きく、また、時代や社会の変化によっても活動ニーズは大きく変わるので、プログラム作りにはそういった変化に対応する視点が必要であると感じました。

・ボランティアになかなか結び付かない、希望する活動に出逢えないという声もありました。どのような募集方法、載せる文言がいいのか（インターネット等のSNSを活用した募集は有効的なのか、紙媒体がいいのか、シニアという名称でターゲットにささるのか等）、募集や広報が課題の一つであると感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・具体的な取り組みやポイントが聞けて、ヒントを沢山得られました。また、当事者の声を聴けたことが一番の大きなおみやげとなりました。

・シニアの中でもリーダーの成り手が少ない、働かないボランティアがいる、一部の人は有償じゃないと参加しない等、なんとなく感じていたことを納得することができました。

・シニアの定義よりもひとそれぞれの能力、体力の差で違ってくるけれど、自分としては年齢そのものより、どれだけ打ち込めて、楽しく達成感が得られるかが大切だと思う。

企画・運営

福田　絵里佳（北区社会福祉協議会）【主担当・報告書】

鹿住　貴之（認定NPO法人JUON（樹恩）NETWORK）

１３　地域で進めるSDGs
～「誰一人取り残さない」世界をつくる～

開催目的

2015年９月に持続可能な開発目標（SDGs:SustainableDevelopmentGoals）が採択され、2030年までに達成すべき17の目標が設定されました。経済・社会・環境のバランスが取れ、「誰一人取り残さない」世界を2030年までに実現することを目指すSDGsは、私たちが求める地域や生活のあり方とも大きく関わっています。世界が目標として掲げるSDGsを実現するために、各地域での取り組みがとても重要となっています。しかし、地域で具体的にSDGsを進めるにあたり、どうやってやっていけばいいのか分からないという声があります。

そこで、この分科会では、SDGsの実践事例から学び、自分たちの団体や活動に具体的にどのようにして進めていくかを考えます。

開催日時

２月10日（土）　14:00～16:30

参加者数

29名（参加者21名、出演者３名、スタッフ５名）

出演者

新田　英理子さん（日本NPOセンター/ SDGs市民社会ネットワーク）

奥平　真砂子さん（日本障害者リハビリテーション協会）

谷本　有美子さん（北区リサイクラー活動機構）

内容・成果・課題

分科会の最初に、SDGsをはじめて知る参加の方もあり、コーディネーターである新田さんからSDGsの解説が行われました。

・ポイント

- ✓ 正式な名称は、我々の世界を変革する、持続可能な開発のための 2030 アジェンダ（Trasforming our world:the 2030 Agenda for Sustainable Development）
- ✓ 貧困のない、持続可能な世界を次世代に受け継いでいくことを目指した世界規模の目標
- ✓ 2015年９月、世界193か国が国連総会にて採択
- ✓ 2016-2030までに達成する国際目標
- ✓ 多様な主体の参加により、オープンなプロセスを経て作成
- ✓ 17ゴール・169ターゲットを踏まえつつ、各国政府が国家目標を定め、国家戦略等に反映していくことを想定
- ✓ SDGsを共通言語のツールとして、他分野や他地域とつながるきっかけとなりうる

新田さんからは、特に、市民活動で重要な要素が、前文の４条に書かれていることであるという指摘がありました。

この偉大な共同の旅に出発するにあたり、私たちは、誰ひとり取り残されることはないことを誓う。私たちは、人間の尊厳にこそ基本的な価値があることを認識し、全ての目標とターゲットが、すべての国、人々、そして社会のあらゆる要素において実現することを願う。私たちは、最も遠くに取り残されている人々にこそ、第一に手が届くよう、最大限の努力を行う。

新田さんの解説後に、奥平さんと谷本さんから、自分たちの団体で、どのようにSDGsを取り入れて活動しているのかをお話いただきました。奥平さんからは、障害者団体として、SDGsを他分野のNGOとの連携や企業との連携の接点として、捉えているとお話がありました。特に、2006年12月13日に国連総会において採択され、2008年５月３日に発効した障害者の権利に関する条約（略称：障害者権利条約）（Convention on the Rights of Persons with Disabilities）とSDGsの親和性は高く、２つの道具をうまく組み合わせ、インクルーシブ社会の創造を行っていきたいと。

谷本さんからは、1992年に発足した北区リサイクラー活動機構の事例発表が行われました。団体は、北区で、地域社会のためにリサイクル事業・活動の推進と発展を図ることを目的として設立されました。団体が抱える課題としては、25年に及ぶ活動実績と担い手の持続、行政のタテ割りに収まりがちな活動展開、リサイクルに関わる社会経済環境の変容があげられ、SDGｓの視点を団体に取り込んでいくと、今後、活動の広がりが期待されるという話がありました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ✓ SDGｓの経緯や、それをどう市民へ広めていくかについて知れたこと、ま た、SDGsを自分たちのものへするという感覚を得ることが出来た。
- ✓ SDGｓの目的がよくわかりました。そして、多分野を横断する可能性を感 じました。誰でも参加できる（協力すべき）キーワードなので、もっと世の 中に広めていくべきだと思いました。
- ✓ 地域に有効に活用できるものと感じました。ボランティア活動を長年続け ている方たちが、活動の停滞を感じたり、気持ちが下降気味のときに、活動自体を評価する（自分たちは良いことできてる！）一つのツールになる のではと思います。

企画・運営

上田　英司（日本NPOセンター）【主担当・報告書】

五十嵐　豪（難民を助ける会）

小川　達也（中央労働金庫）

杉村　郁雄（日本ファシリテーション協会）

１４　交流会

開催目的

「つながりをずっと 出会いをもっと」をテーマにした交流会で、２日目までの分科会を振り返るとともに、ボランタリーフォーラムに参加したみなさんと、新たな出会いや交流を深めることを目的にした交流会です。

開催日時

２月１２日（土）17:00～18:30

参加者数

70 名（参加者 56 名、出演者４名、スタッフ 10 名）

出演者

MECP（Music Explorer Concert Project）

2013 年当時桐朋女子高校音楽科３年生有志で立ち上げた、桐朋学園大学学生を中心とする団体で、学校支援、福祉施設訪問、カフェコンサート、ワークショップなど、音楽を通じた新しい人のつながりをつくるため、様々な活動を行っています。

内容・成果・課題

１．内容

今年は音楽を通じて新しい人とのつながりをつくるために様々な活動を行っている MECP(Music Explorer Concert Project)さんにゲスト出演してもらいました。交流会のオープニングでは MECP さんの演奏や参加者を巻き込んだ音楽ワークショップを行い、和やかな雰囲気を作り出しました。最初にグループ分けを行い、お互い参加した分科会について話せる機会を作り出しました。途中でも MECP さんに音楽演奏をしてもらい、音楽を楽しんでもらうとともに、グループ替えを行い、多くの参加者と分科会の内容や分科会の気づきなどを話せる場を作りました。司会は齊藤ひかり（東京家政大学）と増永めぐみ（日本社会事業大学）が担当しました。

２．成果

・音楽を活用することで、場の雰囲気が和やかになり、みんなで交流会を楽しむ機会となりました。

・軽食とアルコールを含むドリンクがあることで、リラックスしたムードを作ることが出来ました。

・グループ替えを行ったことで、多くの方と交流する場を作ることができました。

３．課題

・時間が短いこともあり、じっくり話し合うまでにはいたりませんでした。

・分科会紹介の掲示板を作ったが、上手く活用するに至りませんでした。

企画・運営

杉村　郁雄（NPO 法人日本ファシリテーション協会）【主担当】

圓藤　理江（一般社団法人インクルージョンネットかながわ）

齊藤　ひかり（東京家政大学）

佐藤　真紀（立教大学）

増永　めぐみ（日本社会事業大学）

粟澤　稚富美（公益財団法人社会教育協会 ひの社会教育センター子育てカフェ「モグモグ」）

小原　恵美（メディステップ（株）ホウカン TOKYO 三軒茶屋）

１５　合理的配慮からみる相互理解

開催目的

障害のある方が、一人ひとりどのようなことを望んでいるか。その対応はどのようにされているかをお聞きするため、当事者をお招きしました。障害者差別解消法の施行前後でどのように変わったかなども参考に聞き、参加者と話し合うことによって、社会や個々の認識の違いを理解し、どのような歩み寄りが必要かを考え、それぞれのフィールドで活かしてもらいうために実施しました。

開催日時

２月１１日（日・祝）10:00～12:30

参加者数

３４名（参加者２４名、出演者４名、スタッフ６名）

出演者

工藤 登志子さん（自立生活センターSTEP えどがわ/筋ジストロフィー）

山野 圭 さん（元舞台監督/高次脳機能障害）

岡本 あや子さん（リカバリーの学校調布校/膠原病、躁うつ病）

横須賀　ヨシユキさん（横須賀デザイン事務所/ファシリテーター）

内容・成果・課題

【内容】はじめに、参加者自身が考える「合理的配慮」とはどのようなことかを、ワークシートに書いてもらい次に、参加者同士で共有してもらいました。共有のところではゲストの方も一緒に話に入っていただきながら、それぞれの考える「合理的配慮」について話し合ってもらいました。皆さんで話してもらうところでは、配慮という言葉がキーワードであったため、むしろ配慮しすぎずに率直な意見が言える場を意識して進められるようリレーションづくりに注力しました。一通り意見交換した後で、ゲストの工藤さんから障害者差別解消法について分かり易く説明をしていただきました。

【成果】今回の取り組みは、ゲストの障がいや背景も様々であるうえ、理解を求める形の内容であるので、ファシリテーターも含めて、しっかりとゴールを共有しました。対立構図にはならずに参加者との距離も近いものになった実感はあります。また、当事者ゲストの母体グループで、引き続きこの取り組みを続けていきたいという申し出があり、４月30日に調布で実施されることになりました。

【課題】会場のセッティングの際に電動車いすのゲストの導線を考えられていなかったのですが、ほかの当事者ゲストの方におっしゃっていただいて、はじめて気づくことができました。きっと、ほかにも配慮すべきところで気づけていないことが、まだまだあるのではないかと感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・それぞれの立場の悩みとか事情とか話せたのは良かった。でも、もっと「合理的配慮」に関心のない人にも聞いてほしかったなー。広めるの難しいですね。

・様々な状況、立場にある人達の想い、考えを共有する事ができて、自身の考えを深められるキッカケとなる素晴しい時間でした

・当事者の方の話をたくさん聞けた。気づき、やりたいことが生まれるテーマ、進行だと思った

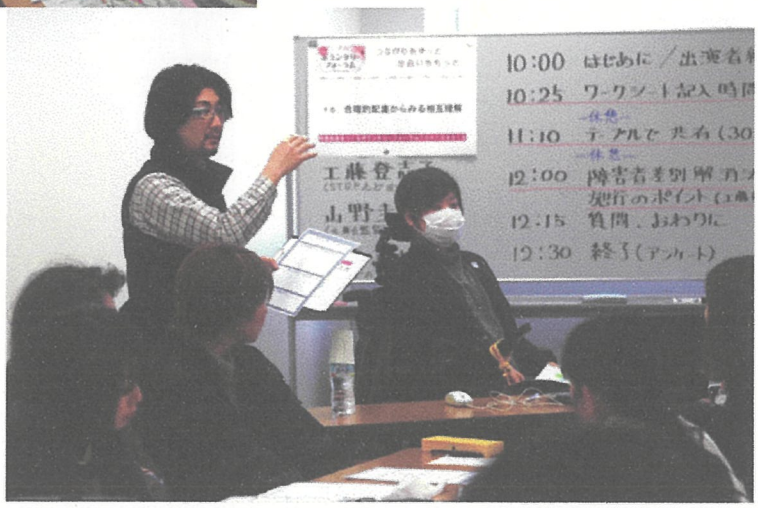
企画・運営

高橋　義博（府中市市民活動センター プラッツ）【主担当・報告書】

五十嵐　豪（AAR 難民を助ける会）

粟澤　稚富美（公益社団法人社会教育協会ひの社会教育センター　子育てカフェ「モグモグ」）

圓藤　理江（一般社団法人インクルージョンネットかながわ）



１６　“踏み出す一歩”ちょっと気になるボランティア

開催目的

ボランティアに興味があるけどなかなか一歩を踏み出せない学生、ボランティアの人手が欲しい受け入れ団体。どうすれば両者の思いをマッチングさせることができるのでしょうか。この分科会は、学生の体験談や受け入れ団体の紹介を通して、ボランティアをはじめてみたい学生が一歩を踏み出すためのきっかけづくりについて考察することを目的として開催しました。

開催日時

２月１１日（日）10:00～12:30

参加者数

２３名（参加者１４名、出演者４名、スタッフ５名）

出演者

大久保　宙希さん（上智大学２年）

増永　めぐみさん（日本社会事業大学３年）

森下　利江さん（渋谷区こどもテーブル「ささはたっこ」）

佐々木　俊宙さん（認定 NPO 法人 JUON（樹恩）NETWORK）

直井　友樹さん（NPO 法人 NICE）

内容・成果・課題

1，　分科会の内容

1）　グループワーク

分科会に参加したきっかけやボランティアのイメージの共有を通して、アイスブレイクを行いました。

2）　登壇者の事例発表

①　大久保　宙希さん（上智大学２年）

子どもたちと関われること、遠方に気軽に行けることに魅力を感じ、被災地の学習支援ボランティアに参加しました。ボランティアを通して、人の役に立つというやりがい、色々な人との出会い、協力できる楽しさを感じ、今では大学から助成金を頂き自分でボランティアを企画する活動も行っています。

②　増永　めぐみさん（日本社会事業大学３年）

学生生活を自由に過ごす中で、友達との差に焦ることがありました。「負けたくない」という思いから、興味を持っていた路上訪問ボランティアに参加しました。たくさんの方とつながることができ、今では私の居場所の一つとなっています。ボランティアはタダで通える社会学習塾だと思っています。

③　森下　利江さん（渋谷区こどもテーブル「ささはたっこ」）

子どもが約７５名、スタッフを入れると約９０人分の食事を作ります。子どもたちは食事のあと、体育室でさまざまな遊びをします。のびのびと遊ぶ子ども達の目キラキラ素敵です。学生ボランティアは短期大学の学生が毎回参加しており、その他にも大学の先生や学生の見学も受け入れています。

④　佐々木　俊宙さん（認定NPO法人JUON（樹恩）NETWORK）

JUON（樹恩）NETWORKでは、都市と農山漁村の人々をネットワークで結ぶことにより、環境の保全改良、地方文化の発掘と普及、過疎過密の問題の解決に取り組んでいます。ボランティア活動を通して人や自然とのつながりを築き、環境保全や農山村の活気づけに貢献することができます。

⑤　直井　友樹さん（NPO法人NICE）

国際系にもともと興味があったわけではなく、大学では遺伝子制御学専攻していました。20才で初海外を体験し、その時の出会いがきっかけとなってNICEの国際ボランティアに興味を持ち参加しました。NICEでのボランティア経験を経てNICEに就職し、現在に至っています。

3）　グループワーク

ボランティアに参加したきっかけなど、誰もが持っている「はじめの一歩」について共有しました。

2,　成果とまとめ

ボランティアを募集する際の工夫として、学生がどのようなきっかけを持ってどのような経験をしたいのかに注目していくことが大切であることがわかりました。またグループワークでは、世代を超えて「はじめの一歩」を共有することで、学生が何を求めてボランティアに参加しているのか、また受け入れ団体の方がはじめの一歩を踏み出した契機についてお互いに知っていただくことができました。

3,　今後の課題

ボランティアをはじめてみたい学生を中心とした分科会の企画や広報を行っていましたが、受け入れ団体の参加者が半数以上を占めていました。今後学生を対象とした分科会を開催する場合、広報や参加料等の工夫が課題になってくると感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・若いみなさんのちょっとしたきっかけから始めたことが今はすごくキラキラ輝いて見えました。ボランティアしたことがない方へたくさん知らせたいな…実感です。

・ボランティアへのきっかけ、初めの一歩をどうしかけていくかに対して考えることができました。

企画・運営

齊藤　ひかり（東京家政大学）【主担当・報告書】

佐藤　亜希（青山学院大学ボランティアセンター）

佐藤　真紀（立教大学）

長瀬　健太郎（NPO法人good!）

直井　友樹（NPO法人NICE）

山口　千紘（東京ボランティア・市民活動センター）

増永　めぐみ（日本社会事業大学）

１７　私たちがつくる「地域包括ケアシステム」①
～地域の担い手は誰？～

開催目的

介護保険制度の下で進められてきた「地域包括ケアシステム」。介護保険が財政的に厳しくなり、国は「ボランティア」に期待し始めました。

この分科会では、地域の助け合いが失われつつある中でも、制度に頼らず、誰もが安心して暮らせる地域づくりに取り組む実践事例を通じて、「地域包括ケアシステム」のあり方について考えます。

開催日時

２月１１日（日・祝）10:00～12:30

参加者数

43 名（参加者 34 名、出演者３名、スタッフ６名）

出演者

加藤　勉さん（NPO 法人みんなのたすけあいセンターいたばし　理事長）

安岡　厚子さん（NPO 法人サポートハウス年輪　理事長）

安藤　雄太さん（東京ボランティア・市民活動センター　アドバイザー）

内容・成果・課題

1.パネルディスカッション　1）コーディネーターの安藤さんの話

認知症の男性が、妻が居眠りをした隙に徘徊して列車に轢かれて亡くなった事故で、鉄道会社が損害賠償を求める裁判を起こしました。一審・二審とも家族の責任を認めましたが、2016 年３月に最高裁で、家族に責任はないという判決が出ました。しかし、そういった方々を地域でどう見守るのかという課題は残されたままです。また、65 歳以上の高齢者の孤独死は、介護保険がスタートした 2000 年から確実に増えています。阪神・淡路大震災の復興住宅では、毎年孤独死が約 60 名いるそうです。

これらは、人のつながりが分断されたことによって、生まれている現象と言えます。つまり、「地域包括ケアシステム」では、単にサービスを提供すればよいのではなく、人のつながりをどうつくっていくのかが必要です。国は、まず自助・互助があり、最後の手段として、公助・共助と言っています。しかし、地域で支え合うためには、行政の仕組みのままではダメで、市民が主体的に考えて実践していくのが、重要でしょう。

2）加藤さんのお話

地域で障害者とボランティアが一緒に、共に生きる社会をつくろうと、「板橋区ともに生きる福祉連絡会」で活動を行ってきました。グループホームやヘルパー派遣などもやってきましたが、中途障害者や難病者のデイサービスとして、08 年に「みんなのセンターおむすび」を立ち上げました。当時は制度に乗らないものでしたが、制度につなげました。なお、これは障害者の法律に基づいていますが、65 歳からは介護保険に移行するため、17 年１月「みんなのたすけあいセンターいたばし」を設立しました。介護保険の課題に対して、ただ批判するのではなく、中央に対して板橋で、現実に立ち向かいつつ、あるべき姿もしっかり追求して運動しようとつくったのです。介護保険は、理念としては非常に立派です。ケアマネジャーも、社会福祉士も立派で、このままやれば上手くいくはずですが、人間は制度の中で仕事に関わると自分自身の人権を考えるので、理想よりも、限られたことの中で仕事をしてしまいます。

地域包括ケアシステムは、簡単にいうと国のギブアップ宣言です。本来、個人の尊厳を守るべき国が、それができませんよと。今、第３層の協議体に関わっています。ただ周りから批判するのではなく、実際に協議体を見た上で、物申したいと思っているのです。自分達が求めるものをつくろうとするなら、障害者運動に学べばいいと思っています。要するに当事者運動です。なお、介護保険に一番欠けているのは、障害者運動で獲得した、当たり前の、個別支援という概念です。

地域の担い手は誰？ですが、たすけあいセンターで、板橋区内の地域センターごとに派遣システムをつくろうとサポーター養成講座をやっています。生活を支える支援サポーターを派遣し、１時間 500 円もらい、サポーターには 400 円払います。支払いの難しい方のために、たすけあい基金も設けています。地域包括支援センターが 18 ありますが、そのうちの２つと今はつながっており、今後は 18 全てでやる予定です。ニーズがものすごくあります。制度や既存のサービスでは対応できないことを、市民が支援するために立ち上げました。制度につながっていないので、補助金は一切なく、寄付でやっています。

「つながる」とよく言いますが、それでは、つながりません。「つなげる」です。つなげてその人ができる可能性をまた利用者につなげていく。これが非常に大切なことだと思っています。

3）安岡さんのお話

西東京市の田無で、いつまでも地域で暮らしたいと、介護と食事を中心に活動を行ってきました。地域の担い手は誰？を考えれば、例えば、子ども食堂に来る子ども、ボランティア、グループホームに入る認知症の方の３名。サービスの受け手と提供側の垣根を取っ払って皆でやっていこうと考えています。

公民館活動をきっかけに、1993 年「ひとり暮らし高齢者実態調査」を行いました。地域福祉計画を市民参加でつくるよう厚生省が言った際、田無でシンポジウムを開いたのですが、その場で市の職員は、「市民の意見は聞かない」と。そこで、ひとり暮らしの高齢者約 1,100 人の半分に手紙を出して調査を行ったのです。報告書『私はこの家で死にたい』では、自分の家にずっといたいという声が上がったのですが、地域の福祉サービスが全くないことが分かりました。94 年に「サポートハウス年輪」として、女性 12 人が出資してアパートを借り、24 時間 365 日の介護派遣サービスと夕食弁当を始めました。

助け合いでやってきた介護を、介護保険に乗せたときは非常に大変でした。介護の楽しさやおもしろさを介護保険改定のたびに国は削ぎ落としてきたので、介護の仕事が好きな人は辞めてしまいます。しかし、職員のモチベーションも上げたいし、地域の方とも一緒につくりたいと、2014 年、カフェ「絆」を始めました。配食サービスとその弁当の販売もしているのですが、食事は人を呼ぶ手段になります。認知症の方がカフェママをしたり、趣味の会をやったり、障害者が作るパンを売ったり。認知症のグループホームを 10 年運動してつくったのですが、認知症カフェも昨年から始めました。更に、子ども食堂も始めたのですが、中学生から高齢の男性まで、今まで関わっていなかった層も、ボランティアなどで来るようになりました。そして、この４月からは、ごちゃまぜを目指して、「昭和の学び舎」を開校させます。これは介護保険の通所型サービスＡなのですが、対象ではない人も入れます。来た人も先生になってもらって、どちらがどちらか分からないようなこともしたいのです。職員の発案です。

行政や社協とは一緒に勉強をして、仲良くやっています。行政には育ってもらいたいですし、それがパートナーシップ。制度の恩恵だけ受けようというのは絶対にダメ。市民の力が弱くなります。縦割りは制度によってつくられますが、ごちゃまぜによってそれを超え、本当の福祉をつくりたいのです。

2.グループディスカッション：６つのグループに分かれ、意見交換を行いました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・地域の実例、事例がとても参考になった。限られたメンバーしか知らない情報をいかに発信していくか、各地域に課せられたテーマだと痛感した。

企画・運営

鹿住　貴之（認定 NPO 法人 JUON（樹恩）NETWORK）【主担当・報告書】

神元　幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）

１８　助成金ってなんだろう？
～ボランティア・ＮＰＯ・助成団体、それぞれの想い～

開催目的

「活動資金の集め方を知りたい」「NPO 法人になったらお金がもらえるって聞いたけど本当？」など、NPO の資金の悩みはたくさんあります。NPO の財源はさまざまありますが、今回は、日頃フラットな立場で出会う機会の少ない、NPO と助成団体が、それぞれの想いを交換する機会とすることを目的に、助成金を「受ける側」「出す側」として、普段思っていてもなかなか聞きづらいこと、言いづらいことを共有するために開催しました。

開催日時

２月１１日（日）10:00～12:30

参加者数

３４名（参加者１９名、出演者１２名、スタッフ３名）

出演者・協力助成団体

太田　健さん（公益財団法人キリン福祉財団）、小川　達也さん（中央労働金庫）、岩村　真奈美さん（中央ろうきん社会貢献基金）、小野　弘人さん（一般財団法人セブン-イレブン記念財団）、佐々木　大輔さん（社会福祉法人中日新聞社会事業団東京支部）、図師　真吾さん（公益財団法人とうきゅう環境財団）、徳田　憲久さん・益田　尚志さん（一般財団法人松翁会）、花崎　和彦さん（公益財団法人損保ジャパン日本興亜福祉財団）、原田　健児さん（社会福祉法人清水基金）、鷲澤　なつみさん（公益財団法人トヨタ財団）、渡邊　肇さん（公益財団法人三菱財団）

内容・成果・課題

○事例報告「助成プログラムから見えること」

助成金プログラムの担当者・太田さん（キリン福祉財団）より、活動団体の資金の種類、助成金の様々な分類、助成金の性格や現状、事業フェーズに沿った助成金活用の基本、申請の上で心掛けることなど助成金の概要から申請の心がけまでを中心に、小川さん（中央労働金庫）より、申請書の確認や団体とのやり取りの中で感じていることとして、「申請書＝コミュニケーションツール」であり、「助成金と自分たちの活動はマッチしているか」「読み手のことを考え、立場や価値観が違う人に伝えようとしているか」、また、助成金申請のヒントとして「申請書はみんなで作ろう」「助成終了後のビジョンを考えておこう」など、重視する基準と申請時・申請後の具体的な注意点を中心にお話がありました。

○「申請書を書いてみよう！」個人ワーク

事例報告でのアドバイスを参考にして、参加者それぞれの活動のうち助成に応募してみたいものを、架空の助成金申請書（A3）に一人ひとりが書いてみるワークを実施。個人参加で助成申請できそうな案件のない人は、事例報告に引き続き太田さん、小川さんから申請のしかたのオリエンテーションを実施しました。

○「申請書を書いてみよう！」グループワーク、
助成団体からのコメント

参加者が作成したそれぞれの申請書について、グループになり１枚ずつ皆で見て、他の参加者や助成団体が付箋を貼ってコメント。グループのメンバー・助成団体から付箋コメントをもらって気づいたことを出し合い、結果を交換。最後に助成団体から、どのような視点で申請書を読んでいるか、更により良い申請にするためのポイントなどについてコメントがありました。

○成果と課題

実際に参加者が作成した申請書への、日頃助成金選考に携わる職員からのコメントやアドバイスは、具体的・実践的でした。普段は直接出会う機会の少ない参加者や助成団体同士が、お互いの想いを直接伝え合える場となりました。受け手にとっても出し手にとってもより良い助成としていくためには、このような生の声をまとまった形で残し伝えていく必要性、また、申請書の記入のみでなく募集要項の読み解き方や事業計画のポイント、活用する財源など、活動をトータルで検討・計画することの必要性が見えました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・なかなか関われない方とお話しできておもしろかったです。受け取られる側の方の意見、思いはとても参考になりました。

・団体の想いや悩みを直接聞くことができ、今後の助成制度運営の参考になりました。また、他の財団の状況を知ることができたのも収穫でした。

・具体的な申請書の書き方などアドバイスいただきとても参考になりました。新しく立ち上げる事業はとても一般に分かりにくく、伝わりにくい分野なので、財団の方々に助成いただくことで、社会的課題を世の中に知ってもらえる効果も高いと改めて思いました。

企画・運営

小川　達也（中央労働金庫）【主担当】

若井　俊一郎（社会福祉法人NHK厚生文化事業団）

野崎　勝也（東京ボランティア・市民活動センター）

熊谷　紀良（東京ボランティア・市民活動センター）【報告書】

１９　障害のある人の「地域で子育て」～助けあい、やわらかい地域社会へ～

開催目的

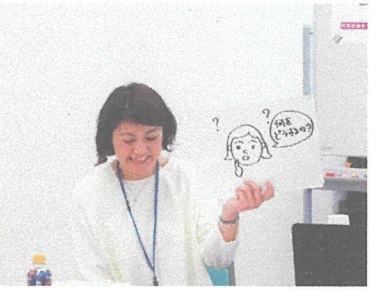
　地域コミュニティーが希薄な今、子育て中は社会からの孤独感や不安な気持ちを感じる母親が少なくありません。それは障がいがある人たちも同じです。しかしながら、理解や配慮はまだまだだと感じていました。この分科会ではお互いを知ることから始め、合理的配慮とはどのようなことなのかを考え、誰もが暮らしやすい地域づくりに向けてのヒントを見つけたいと思い企画しました。

開催日時

２月１１日（日）14:00～16:30

参加者数

１４名（参加者５名、介助者１名、出演者３名、スタッフ５名）



出演者

安藤　朱美さん（NPO 法人日本せきずい基金　副理事長）

西田　梓さん（視覚障害児子育てサポート Mother’s Cafe）

佐野　圭子さん（NPO 法人東村山子育て支援ネットワークすずめ）

内容・成果・課題

【内容】

・子育て支援の現場から感じる「合理的配慮とはなんだろう？」との投げかけに対して、登壇者の方々がどのように子育てをしてきたのかを具体的に話してくれました。

・せきずい損傷を負って車いすの安藤朱美さんは、地域の方の理解を得て、ハード面を工夫することで子育てしやすい環境を整えていきました。特に大きな変化としては小学校にエレベーターが付きました。

・全盲の西田梓さんは、自分で出来ることと手伝って欲しいことを明確に相手に知らせています。

　学校の担任の先生とのやり取りは、手紙以外の方法をいくつか挙げ、電話の他にメールで送ってもらい読み上げソフトを使用するなどして情報を得ています。

・市役所のロビーで利用者支援事業を行っている佐野圭子さんは、相談者の話を聞き、困り感を埋めることが、支援の中で出来る合理的配慮になるとおっしゃっていました。

・ディスカッションでは、参加者も活発に多様な視点で意見交換がされていました。

【成果】

・当事者の方々の話しを聞くことで、何に困りどのように工夫しているのかを知ることが出来ました。

・駅にエレベーターが設置されるなどハード面が整ってきても、不便だと感じることも多い。それを埋めるのは、譲り合いや、声をかけあうことが必要不可欠であることを確認しあいました。

・人と繋がることで出来ることが増えることに気づきました。

・ハードよりハートという言葉に皆が大きく頷きました。

【課題】

・障がいに対する理解が貧しく、支援する側される側になりがちです。これからは、お互いに支え合うことが当たり前だという価値観を持つことが重要であり、それは福祉教育を変えていくことから必要なのではないかと思いました。

・子育てのしづらさは家庭の問題だけでなく社会の問題であることを多くの方に考え知ってもらうことが支援につながる一歩だと感じました。

・災害支援のヒントとなる話も聞くことが出来ましたが、今後どのように理解者を増やしていくのか。絶対数が少ないだけに難しさを感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・レポートしていただいた方々が前向き、周囲の力を借りて明るく生きていらっしゃる方々に感動した。

・日常の具体的な話を聞けたから大変満足。

・子育ての話しが具体的に聞けた。困ることがわかりやすく知れた。映像もわかりやすくてよかった

・多くのヒント、１つつながりが得られた。

企画・運営

栗澤　稚富美（財団法人社会教育協会ひの社会教育センター子育てカフェモグモグ）【主担当・報告書】

圓藤　理江（一般社団法人インクルージョンネットかながわ）

白井　長興（シェイクハートプロジェクト）

高橋　義博（府中市市民活動センター　プラッツ）

２０　若者をやる気にさせる活動作り

開催目的

若者世代に活動に参加してほしい。継続的に関わってほしい。彼らにどうアプローチすれば活動の参加につながるのか。いったい、何が若者の心をつかみ、動かすのか。この分科会では、若者をうまく巻き込んでチームをつくり、一緒に社会課題に取り組む団体の事例を基に若者をやる気にさせる工夫について考察していくのを目的とし、開催しました。

開催日時

２月１１日（日）14:00～16:30

参加者数

３３名（参加者２５名、出演者３名、スタッフ５名）

出演者

呉　哲煥さん（NPO 法人 CR ファクトリー）

西岡　真菜さん（セカンドハーベスト・ジャパン）

内田　智子さん（認定 NPO 法人　ESA アジア教育支援の会）

内容・成果・課題

【内容】

1、登壇者の紹介

2、登壇者の事例発表

1）　西岡　真菜さん（セカンドハーベスト・ジャパン）

若者をやる気にさせる活動の事例として、セカンドハーベスト・ジャパンの事例報告を行いました。セカンドハーベスト・ジャパンは、スタッフ２５名ボランティア１００名で活動をしています。ボランティア希望者はインターネットでボランティア登録をします。活動スケジュールが公開されており、ボランティアの予定に合わせて活動に参加できるシステムを作っています。また、ボランティアの種類を単発ボランティア、レギュラーボランティア、リードボランティアと区別化し、それぞれの仕事や責任を明確化しています。

<u>○ボランティア受け入れの際に気を付けているポイント</u>

・普段出会えない人と活動を通してつなげる→世代や国籍を超えた参加者に出会える

・団体活動紹介を行い、社会課題の現場を見る→日本の現状に触れる（食品ロス・貧困問題）

・ボランティア同志のつながりを意識的に作る→友達と参加できる（友達も作れる！）

・誰でもできる簡単な作業を準備する（達成感の共有）→単純作業なので気軽に参加できる

2）内田　智子さん（認定NPO法人　ESAアジア教育支援の会）

ESAは１９７９年から南アジアで教育支援をしている認定NPO法人です。スタッフが４名とベテランボランティアさんの支えで活動を続けていました。団体を持続的に活動するために若者の力必要だと考え、ボランティアをパッケージ化し、夏休みのボランティアの受け入れを始めました。体験ではなく継続して活動に参加してもらうために「ユースチーム」を発足し、現在は、学生が中心にイベント等を盛り上げてくれています。事例発表ではESAの活動紹介とユースチームの発足までの経緯、活動について発表して頂きました。

○ボランティア受け入れの際に気を付けているポイント

・**参加者にやりがいを感じさせる**→活動の説明、一日の振り返りをすることで活動の意味を理解してもらう。

・**居心地のいい雰囲気づくり**→ベテランボランティアさんとの関わり、学生同士が仲良くなれるしかけ作り、活動後のスケジュールの確認とお礼のメール

3）成果とまとめ

若者に活動に参加してもらうためには非金銭的な報酬（達成感や居心地など）が必要となります。ボランティアを受け入れる団体、スタッフはどうしても目の前の業務に追われ賛同してくれるボランティアへの細かい配慮を忘れがちになってしまいます。この分科会を通して団体とボランティアとの関係の見直し、ボランティアと一緒に活動運営していくことの大切さを改めて考える機会となりました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・近い立場で実践したり悩んでいる人もいて、事例も当事者目線の話しをきけて、勇気がもてました。

・人間同士のあたり前のことを大切に、が実感。無意識にやっていることが大切だと気付きました。

企画・運営

長瀬　健太郎（NPO法人　good!）【主担当・報告書】

直井　友樹（NPO法人　NICE）

佐藤　亜希　（青山学院大学ボランティアセンター）

斎藤　ひかり（東京家政大学）

佐藤　真紀（立教大学）

２１　私たちがつくる「地域包括ケアシステム」②
～一緒にワクワクしませんか？～

開催目的

高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援を目的に、可能な限り住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けられるよう、地域包括ケアシステムの構築が進んでいます。高齢者だけでなく、どんな人もともに暮らしていける地域に向けて、私たちにできることはどんなことでしょうか。地域包括ケアシステムを通して考えます。

開催日時

２月１１日（日・祝）１４:00～１６:30

参加者数

２５名（参加者１８名、出演者２名、スタッフ２名、ボランティア３名）

出演者

石井　義恭さん（厚生労働省老健局）

古市　盛久さん（株式会社御用聞き）

内容・成果・課題

はじめに、石井さんから地域包括ケアシステムの背景を伺い、日本の社会の現状や、介護保険を取り巻く状況について理解を深めました。古市さんからは、有償の活動で地域のこまりごとを解決する有償活動の事例と、活動の上で大切にしていることを伺いました。その後、テーブルごとにグループで話し合いをしてもらい、各グループで話し合われた内容を全体で共有しました。

【出演者のお話し】

○石井さん

・今の日本の現状はワクワクできるものだけではない。７５歳以上の人口が高まる認知症の方が地域に増える、独居や高齢世帯の家庭が増える。

・地域の中に住まいがあり、人の暮らしがある。それを支えるためにあるものが地域包括ケアシステム。地域性が日本全国違うため、その地域ごとに進めていく必要がある。

・地域包括ケアシステムの先には、誰もが住み慣れた地域で過ごせる＝共生社会の実現がある。

○古市さん

・「有償互助」という考え方で、５分１００円家事代行サービスを行っている。年賀状の宛名書きや、両手がリウマチの方のビンのフタ開け、介護保険で出来ない趣味やお庭の手入れなど。はじめ無料で行っていたが利用がなく、値段を上げたところ、利用者が増えた。

・担い手が六百人を超え、その９割が大学生。学生、子育てママなど。

・公的資金に依存せず、ソーシャルビジネスとしての経済性も重視している。

・5分１００円で涙を流すお客様がいる。また、参加する学生が正面から受け入れられることで、自分自身が役に立つことを実感している。

【グループワーク】

「地域づくりのすすめ方」というテーマで ①課題にどう向きあうか ②ワクワクする課題へのアプローチ の２点について話しあいました。担い手の高齢化や障がい者などの参加のしにくさなど、地域にある課題というよりは、地域自体が抱える課題が多く共有されました。

【成果と課題】

出演者のお二人のお話しからは、高齢者だけにとどまらず、どんな人も地域の中で支え・支えられながら、その人らしく暮らせる地域づくりへのヒントを得ることができました。グループワークでは、参加者それぞれに課題意識や疑問があり、わくわくしながら話すのがなかなか難しい場面もありましたが、地域の抱える課題を多く共有することができました。時間が足りず、課題に対するアプローチまで意見交換が至らなかったことは残念でした。少ないながらも共有されたアプローチの中には、前向きなものが多かったので、全体で共有できたことが良かったです。

参加者の声（アンケート結果などから）

・ボランティアに国から過剰な期待があるような気がして、ボランティアセンタースタッフとしてどのように担い手を募集し、養成していけばいいか少し困惑していましたが、まずは既存のちょこっとおたすけサービスなどと連携していきたいと思います。

・地域を実際に丁寧に支援されている方のお話をきき、とても魅力を感じました。ワクワクしたお仕事ができるよう今日の話を持ちかえり、今後に活かしていきたいと思います。

・御用聞きの話は新鮮でした。課題を解決するのは難しいと思いました。

企画・運営

志田　五十鈴（狛江市市民活動支援センター）【主担当・報告書】

小原　恵美（メディステップ（株）ホウカン TOKYO 三軒茶屋）

神元　幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）

２２　災害とセルフケア

開催目的

災害時、避難所などの落ち着けない状況で、どのように自身をケアしていくか…2015 年、茨城県常総市で被災したソーシャルワーカー兼ヨガインストラクターを講師に招き、セルフケアのための身体ほぐしを実際にやってみました。

「自己のケアあっての他者のケア」という視点に立ち、自分を癒す方法をやってみることを目的に企画しました。

開催日時

２月 12 日（日）14:00～16:30

参加者数

５名（参加者５名、出演者１名、スタッフ３名）

出演者

柴田　智子さん（ヨガサークル主宰）

内容・成果・課題

もともと、人とのコミュニケーションが苦手な方がリラックスできるような「場」がつくれないかという想いがきっかけになっています。その想いを分科会として企画するにあたって、災害をキーワードにし、落ち着ける「場」づくりが困難な状況でもできるセルフケアを、被災体験した方から学ぼうと考えました。

なぜ、“セルフ”ケアか？ 自分のケアができてこその他者ケアであるという考えからです。そして、それは実際、出演者の柴田さんがやってきたことでもあります。

＜内容＞

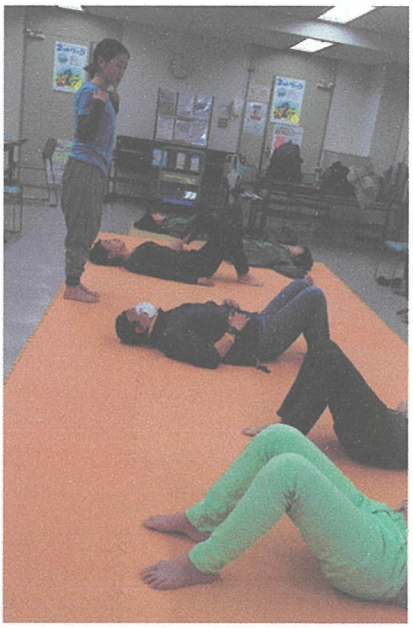
①座学　　常総市の水害について

常総市水害記録『忘れない 9.10』（茨城新聞社制作・常総市発行）を配布し、被害概要について共有しました。上空写真で出演者の家がどのあたりにあるか、そして、出演者の避難した市役所や仮設風呂、災害ごみが積みあがる仮置き場などの写真を見ながら当時の様子を振り返っていただきました。参加者からは被災当時のことだけでなく、現在の地域の様子についても質問が挙がりました。

②実践　　身体ほぐし

最初に、足を肩幅に開き手を前後にただブラブラと振るという、スワイショウという運動にみんなで挑戦。話したり、足を動かしながら 20 分間

行いました。身体が温まったところで、深く呼吸をしたり、ヨガや柔軟体操のような動きをやってみます。自分のペースでゆっくり動いたり休憩をとるなど、無理のないようにやっていただきました。



＜成果・課題＞

参加者より「災害が発生すると、以前の災害をつい忘れてしまう。今日は生の話を聞きながら、振り返る機会があってよかった」、後日には「あれから身体の温かさが持続している」といった声をいただきました。

また、出演者からは「人前で話したことで、ひとつの区切りになった」という感想がありました。出演者・参加者という一線を越え、お互いの気づきの場となったと思います。

常総市の災害は局所的で人的被害は多くはありませんが、災害規模の大小で被災した方々の辛いお気持ちを量ることはできないことを、企画者として改めて実感しました。参加者の感想にあったように、多くの人に親しまれるよう「災害体操」などとして確立する、というのは良いアイデアだと思いました。

課題は、ヨガをやる分科会、自分癒しの分科会だと思った方も多かったようで、セルフケアのその先をめざした企画だということが概要からは見えづらく、参加者が見込みよりも少なかったことです。今後、見えた課題を生かし、ブラッシュアップして「災害とセルフケア」のキーワードで講座などを開催できたら、と考えています。

参加者の声（アンケート結果などから）

・セルフケア（呼吸法やヨガ）の知識を知ることで気持ちが前向きになれるので、災害時にも役立つ。実際の災害のリアルなお話も大変参考になりました。

・お話を聞くだけでなく、身体を動かして、とてもリラックスできました。ぜひ、災害体操を確立し、始めてほしいと思います。

・人との交流が得意でない人、とお勧めの項目に記入してあったところに興味を持ちました。

・体操やヨガは災害時にみんなで行うことは難しいと思います。しかし、そういうときこそ必要なものなのだという認識が生まれれば良いのではないかと考えています。

企画・運営

秋池　智子（東京ボランティア・市民活動センター）

２３　NPO 法から 20 年
～市民社会の源流をたどる～

開催目的

特定非営利活動促進法が成立して 20 年。現在、法人登録数は５１,000 団体を超えました。

市民活動を促進するための法人格がなかったころと比べると、NPO が社会的な信用を獲得することができ、活動しやすい様々な社会基盤が整いました。

一方で、２０年の経過とともに、NPO を取り巻く環境も大きく変化しました。

改めて、２０年前の NPO 法成立期の歴史を振り返り、NPO 法の成立の背景から学び、市民社会の源流とたどる機会とします。

開催日時

２月１１日（土）　14:00～16:30

参加者数

２６名（参加者２６名、出演者３名、スタッフ３名）

出演者

松原　明さん（特定非営利活動法人シーズ・市民活動を支える制度をつくる会 理事）

相馬　宏昭さん（特定非営利活動法人 ぱれっと 理事長）

内容・成果・課題

NPO 法のできた背景について、講師である松原さんから解説を頂きました。

<u>NPO 法ができた背景について</u>

1990 年代までのひとつの考え方に、「社会をよくしていく」という役割は、行政の役割であるという認識がありました。しかし、市民が政府だけに任していても、十分対応をしてくれないということに気づきはじめた時代でした。

社会を変えていこうという動きのなかで、NPO 法を作る意義に、大きな３つのポイントがあったと思います。

１）　社会の在り方の構造を変えようとした動きであった。世の中を良くすることを政府の仕事だけにするのではなく、市民が主体となって動かすこと。

２）　世の中を良くするために、個人だけでなく、団体として活動を行うことができるようにすること。その団体の政府の許認可制度から、市民活動団体が簡便に法人格を取得することができるようにしたこと。

３）　公益活動の財源として、非営利概念の考え方を導入すること。団体の経済的な基盤をつくるために、政府からだけの財源に頼らず経営をしていく必要があった。無報酬ではない。非営利は利益を分配しないということを導入したこと。

市民社会の制度をチェンジしようとした法律でした。

企業セクター・議員・労働組合が立法運動にかかわった背景

時代としては、バブル経済が崩壊し、政府の財源が行き詰まることが予想されていました。政府がなんでも福祉をやってくれるということへの期待感がなくなっていったことがありました。企業がそれを分担していくのは難しい状況がありました。よって、社会福祉を担っていくために、民間が自主的に動いていくことが必要とされていたことがありました。

相馬さんから、当時、NPO 法人の法人格を取得しようとした経緯について、お話をいただきました。ぱれっとは、1983 年に設立され、クッキー・ケーキの製造･販売を通してしょうがい者の社会参加と自立を目ざす福祉作業所を初期に立ちあげました。その後、事業規模が拡大していき、職員の雇用やグループホームなどの運営をしていくなかで、法人としての顔を持つ必要性を感じました。社会福祉法人などの別法人も検討しましたが、非常に要件が難しく、自分たちの活動をみたときに、市民の自由な活動をしていくことを大事にしていたので、NPO 法人としての法人格の取得をしました。

参加者の声（アンケート結果などから）

- ✓ ＮＰＯ法人のこれからが整理できました。今後の講座・相談等に生かして いきたいと思います。
- ✓ ＮＰＯ法の成り立ちについて楽しく学べることが出来ました。営利・非営利 の問題は、登録団体と度々議論になるので、今後の参考になると思います。
- ✓ ＮＰＯ法制定前の 1990 年の時代状況や福祉国家に代わる社会をという大 きなビジョンが伝わり、大変勉強になりました。

企画・運営

上田　英司（日本 NPO センター）【主担当・報告書】

市川　徹　（世田谷社）

熊谷　紀良（東京ボランティア・市民活動センター）

24　被災者支援／人道支援～「人」を支援するという意味～

開催目的

地震や洪水などの被災者支援におけるボランティアやNPOの役割がより重要になっています。日本と海外、自然災害と紛争、状況や条件が異なっていても、「人」を支援するという原則に違いはありません。参加者が、これまでの日本や海外における被災者支援／人道支援に対する評価を知り、支援に関わる全ての人が大切にしなければならないことを意識できるようになることを目的としました。

開催日時

2月11日（日・祝）14:00～16:30

参加者数

20名（参加者14名、出演者2名、スタッフ4名）

出演者

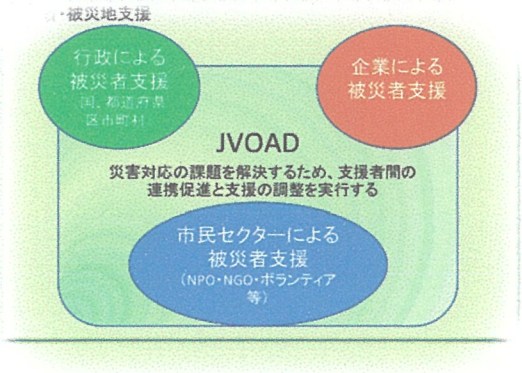
明城　徹也さん　全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD）

松尾　沢子さん　国際協力NGOセンター（JANIC）

五十嵐　豪さん　難民を助ける会（AAR Japan）

内容・成果・課題

冒頭のワークショップでは、最初に参加者が各々に考える「支援に大切なこと」を発表しました。続いて、複数の絵を見ながら、支援者の考える「良い支援」が抱える課題を話し合いました。そして、支援者が各々の信念や正義感に基づき、何が「良い支援」であるかを考え、それぞれがバラバラに支援を実施する場合、支援の受け手である被災者や難民にどのような影響を及ぼすのか、参加者全員で考えました。東日本大震災の被災者支援や、1990年代のルワンダ内戦の難民支援に対する振り返り評価が紹介されましたが、どちらの場合も、支援者間の連携調整不足や、被災者/難民に対する説明不足が指摘されています。



見えてきた課題に対して、支援者はどんな取り組みをしているのでしょうか。出演者の明城さんには、支援者同士が連携することの大切さと、近年の災害対応の連携調整の仕組み作りについて、東日本大震災や熊本地震など実例を挙げながら、ご説明いただきました。災害対応の現場では、行政や市民、NPOや個人のボランティア、そして企業の社会貢献部門など、支援者にも多様性があります。東日本大震災の対応においては、官民の連携が有効に機能し、迅速な支援に繋がった好事例がありましたが、こうし

た連携調整の仕組みが平時から構築されているわけではありません。災害ボランティアセンターは個人ボランティアの窓口になりますが、NPO などの支援団体を受け入れ、これらを行政など支援関係者と繋ぐ仕組みもありませんでした。そこで、支援者間の連携調整を図る役割としての JVOAD が 2016 年に正式に立ち上がりました。熊本地震（当時は準備会）や九州北部豪雨では、JVOAD がリードし、行政や市民社会、企業などが、より良い支援を被災者に届けるために連携することができました。

多様な背景を持った支援者が、スムーズに連携調整を図りながら、「人」を支援するという共通行動を取るためには、共通言語が必要です。「支援の質と説明責任向上ネットワーク（JQAN）」の事務局長も務める松尾さんには、支援の質と説明責任に関する国際基準である「スフィア」と「CHS」について、ご紹介とご説明いただきました。支援の基準（最低基準）には、場所や事象を問わず、「人」を支援するために支援者が守るべき事がまとめられています。日本では、特に東日本大震災以降にこうした国際基準への関心が高まってきました。しかし当初は、日本国内で国際基準を学べる機会は限られていました。そこで、JQAN は国際基準の研修ができる日本人講師の育成と、日本語の教材の開発を進めてきました。現在では、日本各地で研修が開催され、多くの支援者や支援に関わる可能性がある人が、国際基準を学んでいます。日本の自治体として初めて、徳島県が支援の基準を職員向けの研修として取り入れた事例などが紹介されました。

未曾有の大災害の被災者や、悲惨な紛争から逃れた難民を目の当たりにすると、何かしてあげたいと思う人が多くいます。「人」を支援しようという行為の多くは、温かい優しさと、純粋な思いやりに満ちています。一方で、善意の気持ちや思いが詰まった「支援」行為そのものを大切にし、支援の先にある本来の目的を見失ってしまう事があります。大切なのは「支援」そのものではなく、支援を受ける「人」です。「人」が人間として生きていくのに必要なのは、生命だけではありません。尊厳や安全も人間としての生活には欠かせない部分です。それらを回復するための手助けをするのが、「人」を支援するということなのではないでしょうか。いくら善意に満ち溢れ、充実感のある支援活動を行ったとしても、結果として、支援の受ける「人」の尊厳や安全を脅かす結果となっていたら、それは良い支援とは言えません。だからこそ、被災者や難民が質の高い支援を受けられるように、支援の共通言語を学び、他の支援者と連携調整を図る努力を、常に怠ってはなりません。それが、支援者としての責任なのです。

参加者の声（アンケート結果などから）

「人を支援する意味を考え・知る、支援に大切なものを教えて頂きました。」

「誰のための支援か、尊厳を守ること、というキーワードは大きな気づきでした。」

「支援の世界基準や見方は、今までの自分に足りなかった。」

企画・運営

五十嵐　豪（難民を助ける会）【主担当・報告書】

杉村　郁雄（日本ファシリテーション協会）

谷口　陽香（東京ボランティア・市民活動センター）

２５ 地域・家庭と共にみんなでつくる「みんなの学校」とは？

開催目的

「子どもたちのために何かできることはないか。」「学校をよりよくしたい！」などの想いをもった方々は、たくさんいると感じています。しかし、実際のところ、近隣の学校の地域の人として、また学校の保護者として、学校をみんなで作ろうと考えて、主体的に動いている方は多くないと考えます。本分科会では、地域・家庭・学校が共にみんなでつくる「みんなの学校」とはどのような学校なのかを、映画「みんなの学校」をきっかけに、さまざまな立場の方と一緒に考えるために企画しました。

開催日時

２月１２日（日）13:30～16:30

参加者数

53 名（参加者 48 名、出演者１名、スタッフ４名）

出演者

館野　峻さん（小学校教諭/いたばしフューチャーセッション実行委員）

内容・成果・課題

【内容】

学校の教職員や子どもの支援に関わる方、保護者、大学生などが「学校」「家庭」「地域」それぞれの立場で参加されていました。３人一組の簡単な自己紹介をしてから、映画「みんなの学校」を鑑賞しました。映画を真剣な表情でご覧になっている方や、時折涙を流している方、そして気になったキーワードを用紙いっぱいに記入している方がいらっしゃいました。鑑賞後は、「映画を観て気になったことや心に浮かんだキーワード」をテーマに、感想のシェアをしました。木村前校長の力強い言葉や「子どもが変わると親が変わる。そして地域が変わる」、「周りの子を育てる」など、一人ひとりが気になったことについて和やかな雰囲気の中話し合っていました。マグネットテーブルという手法で新たなグループになり、「みんなの学校」を作るために必要な要素を付箋に書き出しました。「聴く力」や「当事者意識」「コミュニケーション」など、それぞれに重要な言葉が参加者の皆さんの想いとともに集まりました。担当から「それぞれの足りない部分を補い合いながら、みんなの学校を一緒につくっていきましょう」と締め括り、参加者の皆さんのご協力のおかげで、無事閉会の運びとなりました。

【成果】

公立小学校を描いた話題のドキュメンタリー映画「みんなの学校」の鑑賞と対話の時間を通して現状に向き合い、これからの学校像を一緒に考えられるような場づくりを心掛けました。多様なバックグラウンドをもつ参加者が、お互いの関係をフラットに話し合うことができているように感じました。「みんなの学校」をつくっていくためにはまず、現状の学校を問い直し、地域・家庭・学校の３者を、対話を通してつないでいくことで、学校をより良くしていくきっかけを作ることができると感じられました。

【課題】

本分科会を通して、参加者の皆さんがそれぞれの場所で具体的な行動に移していけるような場のデザインを行うことができると、各地で「みんなの学校」のような素敵な学校が加速度的に増えていくと思います。それには、少し時間が足りなかったと感じました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・いろいろな立場や経験の方と感想を伝え合えて、学びが深まりました。大人も子どもも本音で話し合う素晴らしさに改めて気づかされました。

・学校から待つのではなく、私たちから行っていく。一つひとつを当たり前と思わず、きちんと評価し反応することが改めて大事だと思いました。

・小学校で１５年間ボランティアをしていた間にも、学校を取り巻く環境の変化を感じていました。これからの時代に何が必要かを考える機会になりました。

企画・運営

館野　峻（小学校教諭/いたばしフューチャーセッション実行委員）【主担当・報告書】

若井　俊一郎（NHK 厚生文化事業団）

山口　千紘（東京ボランティア・市民活動センター）

２６　クロージング ～出会って、つながって、さぁここから！～

開催目的

関心事や感じ方は一人ひとり異なります。同じ分科会に出て、同じ話を聞いても、受け止め方は様々だと思います。だからこそ、違う視点からの意見を聞くことで、改めて気づくこともたくさんあるのではないでしょうか。クロージングは、ボランタリーフォーラム最後の分科会として、参加者同士の情報交換や交流の場としています。様々な分科会に参加された皆さんと分科会を企画してきた実行委員のメンバー、ボランティアが、ともに学んだことや感じたことを共有していきます。そこでの出会いやつながりから生まれる新しい発見を持ち帰ってもらいたい、と思っています。

開催日時

２月１１日（日）１７：００～１８：３０

参加者数

５９名（参加者５４名、スタッフ５名）

内容・成果・課題

いろいろな人とリラックスして話してもらおうと、今回は出身地でグループを分けてみました。地方出身が多いと言われている東京ですが、思った以上に東京出身者が多く、グループ編成でドタバタするところから始まりました。

グループには、ボランタリーフォーラム参加者だけではなく、実行委員や当日ボランティアも入り、２つのテーマで意見交換を行いました。初めに、分科会に参加しての「新しい発見や気づき」を共有していきました。参加した分科会によって多様な発見や気づきがあったようです。「町に恋する」、「楽しいから始まる」、「まだまだバリアが多い」、「多様な視点が大事」など、どのグループも活発な意見交換がなされていました。

続いて、分科会での自分の発見や気づきに加えて、グループでの意見を聞いて「今後やってみたい」と思ったことを話し合ってもらいました。「今回出会った人と関わる」、「知ろうとする姿勢を持ち続ける」、「若者に大人の背中を見せる」、「ボランティア（人生の幅が広がる）」といった意見も出さ

れていました。最後に、グループで話されたことを全体で共有していきました。

『多様性を認める。出会いが大事。お互いを知って、やりたい事を知ってつながる。思いやりを持つ。世の中の課題を知る。障がいのある人の暮らしを知る。気づきを発信し、学びを伝える。』などなど、とても大切なキーワードが出されました。中でも、今回の出会いを大切にして実際につなげていく、今回学んだことを発信し、つなげていくといった意見がどのグループでも見られました。社会を変えていけるのは私たち、市民。気づいた人から始まる一歩がここから始まり、どんどん広がっていく予感のする時間でした。

また次回お会いできることを楽しみにしています！

企画・運営

神元　幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）【主担当・報告書】

鹿住　貴之（認定NPO法人JUON(樹恩)NETWORK）

長瀬　健太郎（NPO法人good！）

志田　五十鈴（狛江市市民活動支援センター）

鈴木　正昭（りすこ（おおた復興支援活動連絡協議会））

山口　千紘（東京ボランティア・市民活動センター）

特別企画

27 OPEN CAFE

開催目的

分科会の合間に一息つきたい、知り合った方がたともう少しお話したい…。

参加者・来所者とともに、くつろぎと交流のスペースをつくります。

開催日時

2月10日（土）9:30～17:00　　2月11日（日）9:30～17:00

参加者数

2日間で約500名（カフェ利用者、ボランティア、スタッフ）

出演者

ボランタリーフォーラム参加者の皆さま、実行委員、ボランティアスタッフなど

東京ボランティア・市民活動センター来所者の皆さま

内容・成果・課題

休憩スペース（カフェ）の運営と、交流のきっかけづくり

- ボランティアスタッフが、あたたかいほうじ茶とコーヒーを1杯ずつ淹れて提供
- お茶やコーヒーを淹れている間、利用者・フォーラム参加者とのおしゃべり、交流
- ゆっくりくつろげる空間づくり

ボランティアの声

- フォーラムに参加された様々な年代の方と、喫茶店のマスターになったような気分でお話できて楽しかったです。
- フォーラムをきっかけにボラセンを知った方がいたり、逆に普段ボラセンを使っている方がフォーラムを初めて知る機会になっていたのがよかったです。その橋渡し的なポジションにお茶スペースがあって、交流の場に自分も参加できて楽しかったです。
- フォーラム参加者の方に「来て良かった」「毎年来ています」「スタッフの方との再会も楽しみです」など、さまざまな声をいただきました。Cafeで参加者同士が情報交換をされていたり、再会されたりしている様子も見られました。また、私自身も何年かボランティアとして参加させていただいてきたことで、皆様との再会が楽しみの1つとなっております。今後もその時々のニーズに沿った企画盛り沢山の、この素晴らしいフォーラムが続くことを楽しみにしています。

企画・運営

東京ボランティア・市民活動センター（森）、ボランティアのみなさん

OPEN CAFE

28　情報誌『ネットワーク』表紙原画展

開催目的

東京ボランティア・市民活動センターで発行している情報誌『ネットワーク』（隔月刊・24ページ）の表紙原画展を開催しました。2016年度より、フローラル信子さんに描いていただいている表紙は、「市民活動のイメージをとらえている」「特集記事にリンクしたイラストなので、以前よりも内容が読みやすくなった」「絵に“愛”がにじみ出ている」など、好評をいただいています。

今回、本誌を知らない多くの方にも見ていただこうと、ボランタリーフォーラムとのタイアップ企画とさせて原画展を催しました。

開催日時

2月10日（金）～2月12日（日）

参加者数

・フォーラム参加者、実行委員、ボランティア

・東京ボランティア・市民活動センターの来所者

出演者

フローラル　信子さん（イラストレーター）

内容・成果・課題

イラスト掲載号の特集テーマを添え、特集から着想したイラストを楽しんでいただけるようにしました。原画との質感の違いがわかるよう、印刷後の表紙も並べています。また、原画を送ってくださるときに同封されている、イラスト付きお手紙も掲示させていただきました。

原画展のおもな目的は、素敵なイラストを多くの方に見ていただくことです。そして、ゆっくり眺めることで、フローラル信子さんがどのような想いや視点で描いてくださったかを、皆さんに自由に想像

していただいたり、お手紙からフローラルさんの優しさや心配りを感じていただけたら……という隠し目的もあります。

もう一つは、原画と印刷との違いを見ることで、NPO やボランティアグループで印刷物をつくるときなどにも参考になるかな…という間接的な狙いもありました。

ボランタリーフォーラム会期中は、Open café を開催しており、原画展とともにフリースペースは華やかな雰囲気になりました。お茶やコーヒー、お菓子を口にしながら、イラストを眺める人びとの姿も多く見受けられました。イラストはフォーラムの前後１週間ほど掲示していたので、参加者以外にも多くの来所者の方に見ていただきました。

イラストを撮影していた方々がいて、人数は多くないものの、年代がさまざまだったことに、フローラルさんのイラストの魅力を実感しました。

参加者の声（アンケート結果などから）

・ボランタリーフォーラム初参加で緊張していたので、イラストを見てほっとしました。

・参加していないのに、お茶をいただいたり原画展を見ることができました。ボランタリーフォーラムの一部に触れることができて嬉しかったです。

・原画展の手づくり感がいいですね。

企画・運営

秋池　智子（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】

佐藤　新哉（東京ボランティア・市民活動センター）

野崎　勝也（東京ボランティア・市民活動センター）

山口　いさえ（東京ボランティア・市民活動センター）

２９　ふれあい満点市場～ＮＰＯ・ＮＧＯの作品展示販売～

開催目的

通販やインターネットでいろいろな物が買えるようになった時代。みなさんは、自分が普段なにげなく使っている物を作っている方を知っていますか。ふれあい満点市場では、ボランティアグループや福祉作業所の方が、手作りの作品を展示販売しています。作品には、作り手の想いがこめられています。お買い物をしながら、作品ができるまでのことや、作品を作っている方のことを聞いてみませんか。

参加団体

１０団体・２５名

＜団体名＞ジャカルタ・ジャパン・ネットワーク／東京都青年団体連合／ＮＰＯ法人共同作業所かたくり／ＮＰＯ法人地球と友と歩む会　ＬＩＦＥ／ＮＰＯ法人飛鳥会　つばさ工房／オレンジライン／チェルノブイリ子ども基金・未来の福島子ども基金／わぴねす／困ったときのSOS／東京ボランティア・市民活動センター

内容・成果と課題

「ふれあい満点市場」は、福祉作業所やボランティアグループ、国際協力団体等の物品を東京ボランティア・市民活動センター（セントラルプラザ１０階）で常設された委託販売スペースです。顔と顔を合わせて「ふれあう」ことを大切にしたいという想いをこめていますが、実際に活動されている方とふれあう機会はそんなに多くはありません。出展会場は、セントラルプラザ１階の区境ホールで、吹き抜けで明るく、人通りもあるオープンスペースです。セントラルプラザへ来所された方や買い物にいらした方、単に通行された方も気軽に立ち寄っていただけるような雰囲気づくりをし、そこで作り手の顔が見え、思いが直接伝わるように、活動に関わる団体の方々や作品を作っている方々と一緒に出展販売を行いました。団体の方は商品についての工夫した点やこだわった点などを積極的に伝えたり、団体の活動についての質問に丁寧に答えたりする方もいらっしゃいました。来所された方だけではなく、出展団体同士の交流の場のひとつにもなっています。また、今年も都立新宿山吹高校の生徒さんがボランティアとして協力してもらいました。出展団体の販売のお手伝いや出張販売、チラシの配布等をはじめ貴重な体験となったようです。

企画・運営

西山　はな（東京ボランティア・市民活動センター）【主担当・報告書】

都立新宿山吹高校ボランティアの生徒さん

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO
開催状況

回	開催年	全体テーマ	カテゴリー
1	2004	「つなぐ つながる つなぎあう」	なし
2	2005	「つなぐ。つながる。つなぎあう。」	一日コミュニティスクール、災害から生をみつめる、IT がつなぐ、街を発見する足たち、アートがまちに作用する、ホームレス問題と私たちの暮らしを考える、私にとってのボランティア、介護をかんがえる、社会の仕組みを考える、虐待を防ぐ
3	2006	「つなぐ、つながる、つなぎあう。」	体験ボランティア入門編、ブラッシュアップNPO/NGO、社会の課題最前線！、アート、社会のしくみ
4	2007	「気づく、動く、変える、市民の力。」	格差社会、制度・仕組みの欠陥・ひずみ、社会の課題最前線、ボランタリズム
5	2008	「危機（クライシス）に立ち向かう市民活動」	福祉制度の崩壊から創造へ、環境破壊と創造、ボランタリズム復活への道、暮らしをみつめて
6	2009	「今、市民として“生きる価値”を問う」	社会の仕組みと制度、安心して暮らせる地域社会づくり、「市民社会」の担い手づくり、お金で買えない価値
7	2010	「希望は市民（わたしたち）が創る」	つながる、発信する、考える、育てる
8	2011	「市民（わたしたち）が創る公共～紡ぎあう地域の絆～」	社会に必要な仕組み、地域とのつながり、育ちあう市民、ボランタリズム
9	2013	「試される市民力（わたしたちのちから）」	つながり、生活・くらし、若者の市民力、ボランタリズム
10	2014	「気づく・築く　市民力（わたしたちのちから）」	生活・くらし、地域・居場所、若者の市民力、ボランタリズム
11	2015	「今を想い、未来をつくる」	グローバルとローカル、暮らしと居場所、ボランタリズムと組織運営、いまと未来
12	2016	「私たちがつくる あしたのピース」	なし
13	2017	「暮らしの中から動きだす、創りだす。」	地域、居場所、子ども・若者、市民活動・NPO、ボランティア、社会・制度、当事者・多様性、フィールドワーク
14	2018	「つながりをずっと出会いをもっと」	社会・しくみ、コミュニティ、参加のかたち、生き方・はたらき方

＊2012 年は「第 20 回全国ボランティアフェスティバル TOKYO」開催のため未実施

市民社会をつくるボランタリーフォーラムTOKYO2018　実行委員会名簿

	氏　名	所　属　団　体	備考
1	粟澤　稚富美	公益財団法人社会教育協会ひの社会教育センター　子育てカフェ「モグモグ」	
2	五十嵐　豪	ＡＡＲ難民を助ける会	
3	石川　次郎	Ｌ．Ｖ．アップ	
4	市川　徹	株式会社世田谷社	
5	上田　英司	日本ＮＰＯセンター	
6	枝見　太朗	一般財団法人富士福祉事業団	
7	圓藤　理江	一般社団法人インクルージョンネットかながわ	
8	小川　達也	中央労働金庫	
9	小原　恵美	メディステップ（株）ホウカンTOKYO三軒茶屋	
10	鹿住　貴之	認定ＮＰＯ法人ＪＵＯＮ（樹恩）ＮＥＴＷＯＲＫ	
11	神元　幸津江	いたばし総合ボランティアセンター	委員長
12	齊藤　ひかり	東京家政大学	
13	佐藤　亜希	青山学院大学ボランティアセンター	
14	佐藤　真紀	立教大学	
15	志田　五十鈴	狛江市市民活動支援センター	
16	白井　長興	シェイクハートプロジェクト	
17	杉村　郁雄	ＮＰＯ法人日本ファシリテーション協会	
18	鈴木　正昭	りすこ（おおた復興支援活動連絡協議会）	
19	高橋　義博	府中市市民活動センター　プラッツ	副委員長
20	館野　峻	品川区日野学園	
21	直井　友樹	NPO法人NICE	
22	長瀬　健太郎	NPO法人good！	
23	福田　絵里佳	北区社会福祉協議会	
24	増永　めぐみ	日本社会事業大学	
25	若井　俊一郎	ＮＨＫ厚生文化事業団	

50音順・敬称略

●事務局

	長谷部　俊介	東京ボランティア・市民活動センター	
	熊谷　紀良	東京ボランティア・市民活動センター	
	小野　明子	東京ボランティア・市民活動センター	
	谷口　陽香	東京ボランティア・市民活動センター	
	山口　千紘	東京ボランティア・市民活動センター	

✿ボランティアでご協力いただいたみなさま✿

Ｖフォーラム実施にあたっては、
のべ４５名のボランティアの方にご協力いただきました。
本報告書では、お名前の記載は控えましたが、企画、当日の受付や会場誘導、
分科会の運営など、さまざまな場面で支えていただきました。
ボランティアのみなさまのおかげで、
無事に全日程を終了することができました。
心から感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

〈協賛・協力〉

◆特　別　協　賛

株式会社　ガイア

中央ろうきん社会貢献基金

トヨタ自動車株式会社

株式会社　三菱東京UFJ銀行

◆協　賛

NECネッツエスアイ株式会社

公益財団法人 損保ジャパン日本興亜環境財団

東京都生活協同組合連合会

NPO法人　モバイル・コミュニケーション・ファンド

◆協　力

ペルノ・リカール・ジャパン株式会社

（50音順・敬称略）

ボランタリーフォーラムにご協力いただいたみなさま

Ｖフォーラムを開催するにあたり、多くの方にご協力いただきました。
寄付や物品提供等、ご協力をいただいた企業・団体のみなさま、
当日の全体や分科会の運営にご協力いただいたボランティアのみなさま
企画・運営に携わる実行委員のみなさま
多くの方に支えられ、無事開催することができました。
多大なるご支援・ご協力をいただきましたこと、
心より御礼申し上げます。
誰もが参加できる市民社会を目指し、
活動を続けていきたいと思います。
引き続き、ご支援、ご協力のほど、よろしくお願いします。

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO 2018 報告書

〈発　行〉 市民社会をつくるボランタリーフォーラムTOKYO 2018実行委員会
事務局　東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823　東京都新宿区神楽河岸 1-1
TEL 03-3235-1171　/　FAX 03-3235-0050
http://www.tvac.or.jp

〈発行月〉 2018年7月